

千葉県の独鉱石・独鉱石形土製品(3)

—追加報告ならびに形態分類と編年的予察—

小澤 清男

はじめに

2009年に発表した(1)(1)と2010年に発表した(2)(2)に引き続き、本稿では千葉県における独鉱石資料の集成と研究を、(1)で提案した独鉱石の各部位名と計測位置を基準として行い、(2)で行った計測値の分析と使用石材の検討を踏まえ、これら一連の研究の結果を(3)(3)として発表するものである。

道具の機能・用途を解明し、その道具が出現した背景や変化の背景、更に消滅していく背景などその文化的・社会的背景を解明していくとするならば、現在、各研究者間でばらばらに使われている各部位名や計測位置に基づいて、その基準に基づいて計測値等を求め、分析・研究していくことが重要である。研究対象資料の特徴をより明確に捉えるためには、客観的な観察と計測値の統計的な蓄積が最も重要な作業である。

(1)では、その基準となる各部位名を提案するとともに併せて計測位置を提案し、その基準に基づいて流山市三輪野山貝塚をはじめ千葉市内野第1遺跡出土の独鉱石など計14点と成田市荒海貝塚出土の独鉱石形土製品1点の合計15点について報告し、また併せて千葉県内出土の独鉱石資料について、1985(昭和60)年の作業(小澤 1985a・b)にその後出土した新資料を加え、補遺・訂正を行った。

(2)では、(1)発表後の調査で確認した野田市野田貝塚出土の2点のほか富津市富士見台貝塚出土の1点など計9点を追加し、千葉県における独鉱石資料の集成を行った。そして、野田貝塚出土の2点や我孫子市下ヶ戸貝塚出土の2点など合計16点の独鉱石資料について、(1)で提案した各部位名と計測位置に基づく調査・研究方法で追加報告を行い、併せて千葉県という限定された地域ではあるが、合計44遺跡74点の独鉱石資料を基に計測値の分析を行うとともに、使用石材の岩石種について検討を行った。

今回の(3)では、(2)発表後の調査で確認した印西市馬場遺跡第5地点出土の2点(7-c・d)のほか成田市土屋殿台貝塚出土の1点(14-c)と鎌ヶ谷市中沢貝塚出土の1点(45-a)、東金市から八街市にかけて位置する滝沢貝塚出土の1点(46-a)の計5点を追加し、引き続き千葉県における独鉱石資料の集成を行った。そして、(1)で提案した各部位名と計測位置に基づく調査・研究方法で野田市内町貝塚出土の1点(4-a)、佐倉市江原台遺跡出土の1点(10-a)、成田市八代玉作遺跡出土の1点(13-a)、同土屋殿台貝塚出土の2点(14-a・c)、匝瑳市大堀遺跡出土の1点(18-a)、君津市三直貝塚出土の2点(26-a・b)、袖ヶ浦市山野貝塚出土の1点(27-a)、市原市祇園原貝塚出土の1点(29-a)、千葉市椎名崎遺跡出土の2点(32-a・b)、同築地台貝塚出土の2点(33-a・b)、袖ヶ浦市上宮田台遺跡出土の4点(44-a・b・c・d)、鎌ヶ谷市中沢貝塚出土の1点(45-a)、東金市から八街市にかけて位置する滝沢貝塚出土の1点(46-a)の計20点の独鉱石資料について追加報告を行い、併せて千葉県内出土の独鉱石資料を基に型式学的研究の基礎となる形態分類を行い、さらに編年的位置づけの基礎となる変遷を検討した。また、使用石材の岩石種別判定に基づいた岩石種別出土分布ならびに形態分類に基づいた群別出土分布を検討し、今後の独鉱石・独鉱石形土製品研究の方向性を模索するものである。

1 千葉県の独鉛石

千葉県の独鉛石資料の追加報告を行うのに際し、(1)・(2)と同様に遺跡名の前に遺跡番号を表記し、第8図 千葉県の独鉛石・独鉛石形土製品出土遺跡分布図(小澤 2009、2010に加筆)と対応するようにした。また、遺跡名の後にアルファベットの遺物記号を表記し、第3表 千葉県の独鉛石・独鉛石形土製品一覧表(小澤 2009、2010に加筆・訂正)と対応するようにした(4)。

4 内町貝塚 a (第1図-1、写真図版1)

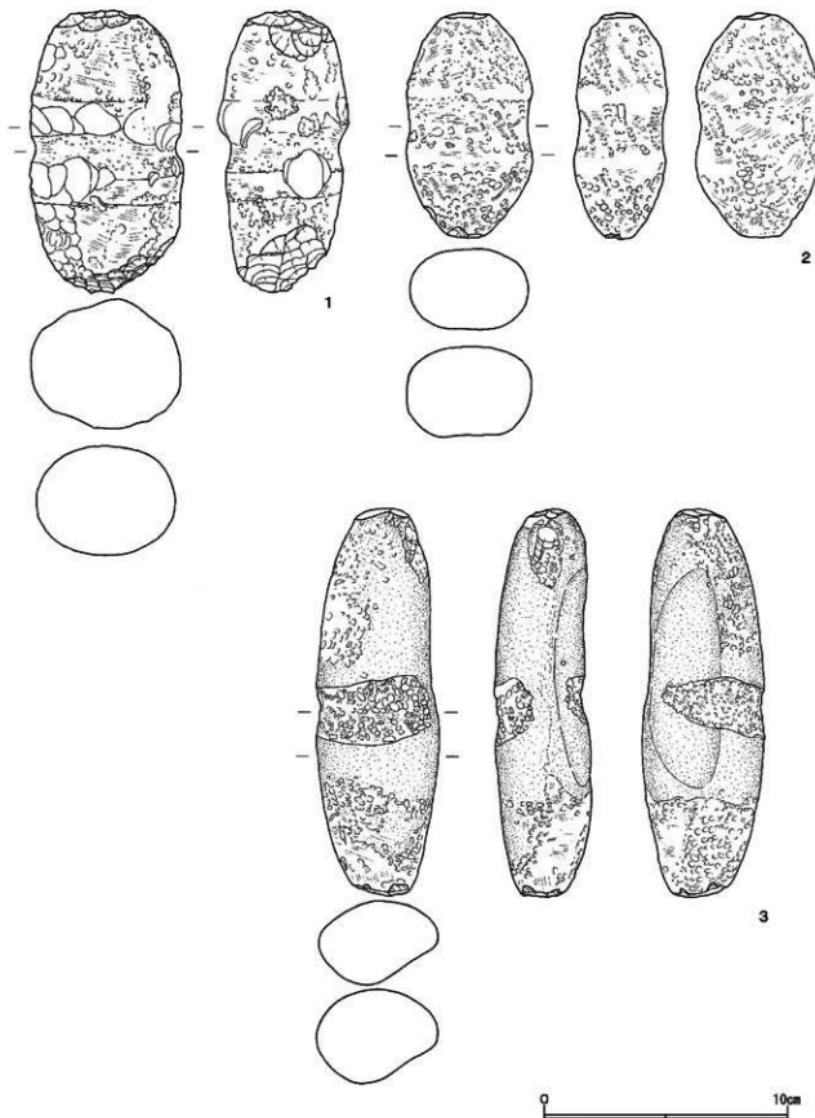
内町貝塚は現江戸川に接し、標高約9～10mの微高地に所在する。貝層は東西60m以上×南北約130mの範囲に分布し、その形成は出土土器から縄文時代早期(茅山式期)に始まり晩期(安行3d式期)まで続くが、主体は後期(堀之内式期)から晩期(安行3d式期)に形成された馬蹄形貝塚で、西側の一部は江戸川堤防下から江戸川河川敷にまで伸びるものと考えられている(飯冢 2000)。独鉛石は、1983(昭和58)年に旧・関宿町教育委員会が主体となり範囲確認調査を実施した際、Hトレンチから出土した(石井 1982、1988)。本稿では、この独鉛石について再調査ならびに再実測し、報告する。

Hトレンチの晩期遺物包含層から土偶、土版、円盤形土製品、軽石製品、それから被熱により赤化した櫻器とともに出土した独鉛石である。出土状況から、何らかの祭祀行為と深い関係があるものと思われる。形態は縦断面形がやや厚みがあるものの扁平気味で、両端部の長さがほぼ同じ上下対称形である。中央部の抉り部は、浅い抉り込みで全周する。隆起部は、被熱による剥離が顕著で全体に高まりは僅かであったが、残存していた部分から復元した結果、幅約1.1～1.2cmで全周する帯状隆起であった。抉り部と隆起部の横断面形は、やや扁平気味な梢円形である。整形は器面全体に製作時の斑点状の敲打痕が認められるが、抉り部および隆起部と両端部の一部を研磨により仕上げている。両先端部は数度にわたる強い打撃による剥離痕が顕著で、大きな剥離面が多数認められる。その他、器面全体に被熱による大小多数の剥離が見られ、被熱痕が顕著である。石材は、閃緑岩である。なお、計測値等は第3表に記載している。

10 江原台遺跡 a (第1図-2、写真図版3)

江原台遺跡は、印旛沼に注ぐ鹿島川と手綱川によって開拓された標高約25～26mの台地上に所在する。古くから縄文時代後期を中心に多量の土器片を出土する所謂「土器塚」がある遺跡として知られており、今までに數度の発掘調査が行われている。それ等の江原台遺跡調査の歴史は、既に詳細にまとめられている(横田 1993)ので、ここでは特に触れないこととする。独鉛石は、国立佐倉療養所移転事業に伴い1975(昭和50)年から1979(昭和54)年に財団法人千葉県文化財センターが実施した発掘調査区から出土したものである(堀部・高田・山田 1980)。本稿では、この独鉛石について再調査ならびに再実測し、報告する。

独鉛石は、発掘調査報告書では名称を「打製石斧」とし出土地点を「表採」としているが、再調査ならびに再実測を行った際、遺物の注記が「551M-012 0005」であったことから調査記録を調べた結果、1979(昭和54)年に実施された第6次調査の際に溝(M-012)の覆土中から出土した遺物であることが判り、溝遺構への流れ込み資料であった。形態は縦断面形がやや扁平で、両端部の長さが同じ上下対称形の独鉛石と考えられる。中央部の抉り部は、浅い抉り込みで全周する。隆起部は全体に高まりは僅かであるが、幅約0.8～0.9cmで全周する。抉り部と隆起部の横断面形は、やや扁平気味な梢円形である。整形は、器面全体に製作時の斑点状の粗い敲打痕が認められ、隆起部を中心にして研磨により仕上げている。その他、両先端部は磨耗痕が顕著である。石材は、安山岩である。なお、計測値等は第3表に記載している。



第1図 千葉県内出土の独鉛石実測図(1)

1 野田市内町貝塚出土(4-a) 2 佐倉市江原台遺跡出土(10-a)
3 成田市八玉作遺跡出土(13-a)

13 八代玉作遺跡 a (第1図-3、写真図版4)

八代玉作遺跡は、東側に根木名川の支流である小橋川によって開拓された小支谷があり、西側に印旛沼を見下ろす標高約35mの台地上に所在する。1955(昭和30)年に成田市在住の故・山田 嶽氏が発見し採集した玉の原石片や管玉未成品がきっかけとなり、1962(昭和37)年と1963(昭和38)年に本格的な発掘調査が行われ、遺跡名の由来となった古墳時代の玉作工房址が検出された玉作遺跡である(寺村 1973)。独鉛石は、成田ニュータウン建設に伴い1971(昭和46)年8月7日から8月25日まで実施した発掘調査の際、古墳時代の竪穴住居跡から縄文土器片とともに出土したものである(天野・杉山・種田 1981)。なお、『千葉県史』では縄文時代後・晩期の遺構・遺物を取り上げ、遺跡名を八代花内遺跡としている(西山 2000)が、本稿では1981(昭和56)年に刊行された発掘調査報告書(天野・杉山・種田 1981)と『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)』(千葉県 1997)に基づき、八代玉作遺跡とした。本稿では、この独鉛石について再調査ならびに再実測し、報告する。

発掘調査報告書では、「調査範囲から縄文土器の破片もほぼ全面にわたって散布していた」(天野・杉山・種田 1981)と記述するとともに、独鉛石が出土した039号竪穴住居跡からは縄文時代後期初頭の称名寺式土器から晩期中葉の姥山III式土器まで多数の土器片が出土しており、独鉛石はこれらと同じ流れ込み資料と考えられる。

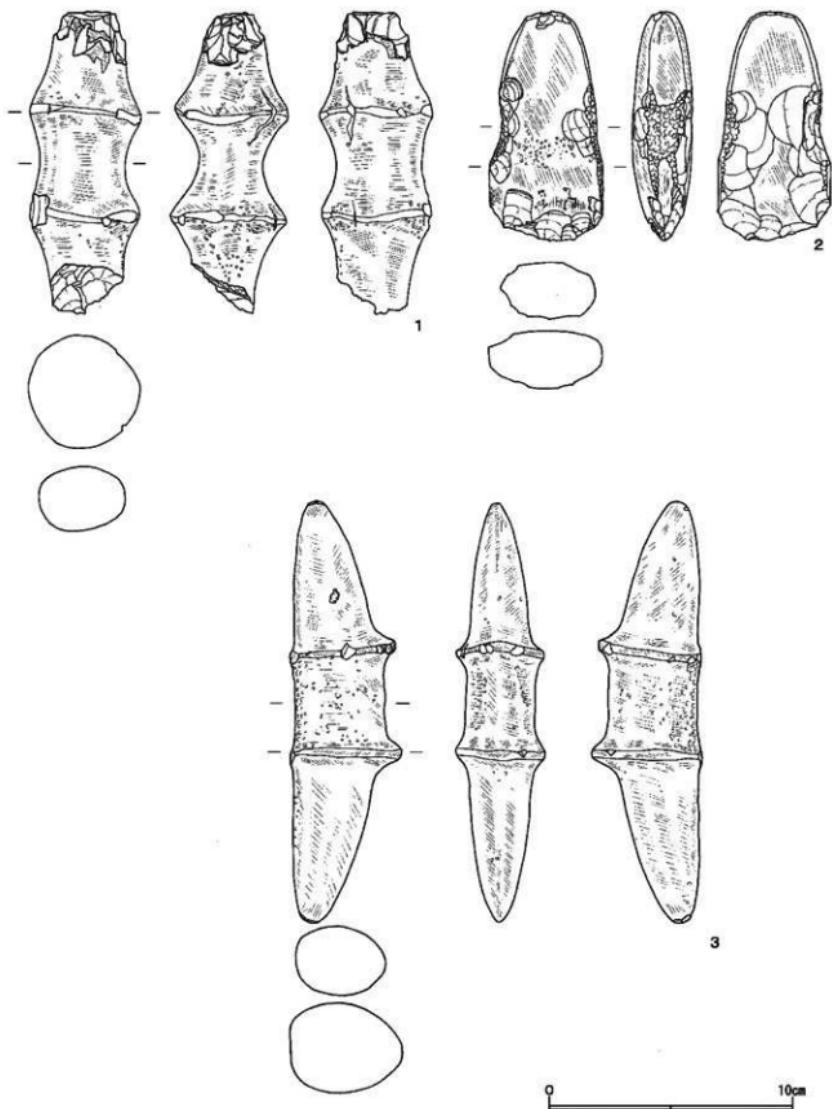
形態は中央部に独鉛石特有の抉り部が認められ、両端部の長さがほぼ同じ上下対称形の独鉛石である。中央部の抉り部と両端部の境に明瞭な隆起部はないが、両端部にその後の隆起部に繋がると考えられる最大径部位がある。両端部の横断面形は梢円形で、抉り部の横断面形は自然縁を選択しているため一部に自然縁面が認められ歪な梢円形である。整形は、両端部の一部に製作時の斑点状の敲打痕が認められる。製作工程は、先ず細長の自然縁を選択し、両端部の先端部周辺と中央部の抉り部を敲打により整形後、端部の一部と抉り部を粗い研磨により仕上げている。両端部と抉り部には、研磨による擦痕が僅かに認められる。その他、両先端部に磨耗痕が認められるとともに一部に弱い打撃による剥離痕も認められ、小さな剥離面がある。石材は、緑色岩である。なお、計測値等は第3表に記載している。

14 土屋殿台貝塚 a・c (第2図-1・2、写真図版4)

土屋殿台貝塚は、根木名川の左岸、標高約32~34mの台地上から標高約22mの西側斜面に所在する。土地区画整理事業に伴い、1983(昭和58)年から1984(昭和59)年まで実施した発掘調査により3点の独鉛石が出土し、2点については発掘調査報告書で報告されている(藤下他 1984、寺内 1997)。そのうち1点(14-b)については、既に再調査ならびに再実測し、(2)でベンガラ塗装された磨製独鉛石であることを報告している(小澤 2010、永嶋 2010)。本稿では、報告書刊行後に確認した1点を加えた残る2点(14-a・c)について、再調査ならびに再実測し、報告する。

14-a (第2図-1、写真図版4)

形態は隆起部の横断面形がほぼ円形に近いが、抉り部の横断面形がやや扁平気味の独鉛石である。一方の端部の先端が欠損しているが、残る部分の形状から推定して両端部の長さがほぼ同じ上下対称形と考えられる。中央部の抉り部は深く抉り込みで全周し、隆起部は顯著に全周する。隆起部間は、3.45~4.10cmと広い。整形は器面の一部に製作時の斑点状の敲打痕が認められるが、中央部の抉り部から隆起部や両端部まで全体を丁寧な研磨により仕上げており、研磨による擦痕が顯著である。なかでも特に、抉り部全体を丁寧な研磨により仕上げている。多くの資料の中でも、本資料のように抉り部全体を丁寧な研磨により仕上げているものは少ない。一方の先端部は、強い打撃により大きく欠損し剥離痕が顯著である。また、もう一方の先端部の周縁部には数度にわたる弱い打撃痕が顯著で、小さな剥離面が多數認められる。石材は、角閃岩である。なお、計測値等は第3表に記



第2図 千葉県内出土の独鉛石実測図(2)
1・2 成田市土塼殿台貝塚出土(14-a・c) 3 匝瑳市大堀遺跡出土(18-a)

載している。

14-c (第2図-2、写真図版4)

遺物包含層から出土したもので、磨製石斧へ転用したと考えられる独鉛石である。両側面には、磨製石斧への転用に際し、研磨が行き届かなかった部位に独鉛石の中央部の抉り部を製作した際の斑点状の敲打痕が顕著である。さらに、器面には抉り部を製作した際の斑点状の敲打痕が認められ、その敲打痕が磨製石斧へ転用した際の研磨痕より古いくことから、独鉛石として機能していた時には抉り部が全周していたと思われる。基端部(頭部)には弱い打撃による剥離痕が認められ、小さな剥離面が多数ある。刃部には、数度にわたる強い打撃による剥離痕が顕著であり、剥離面が認められる。磨製石斧へ転用された独鉛石は、縦断面形が扁平で推定全長が10cm前後の上下非対称形の独鉛石と思われる。石材は、砂岩である。なお、計測値等は第3表に記載している。

18 大堀遺跡a (第2図-3、写真図版4)

大堀遺跡は、九十九里平野を抜け太平洋に注ぐ栗山川の支流である借当川の右岸標高約35mの台地上に所在する。現在、この付近の台地上は畑地となっており、低地との比高差が大きく台地斜面は急である。独鉛石は1935(昭和10)年前後、地元農家の故・平山光一氏が畑を耕作中に発見したもので、その後資料保管者は変わったが、永く間大切に保管されていたため、良好な状態であった⁽⁵⁾。独鉛石の発見経緯ならびに資料紹介は、既に報告を行っている(小澤 1985b)。本稿では、1985(昭和60)年に報告した資料を再調査ならびに再実測し、報告する⁽⁶⁾。

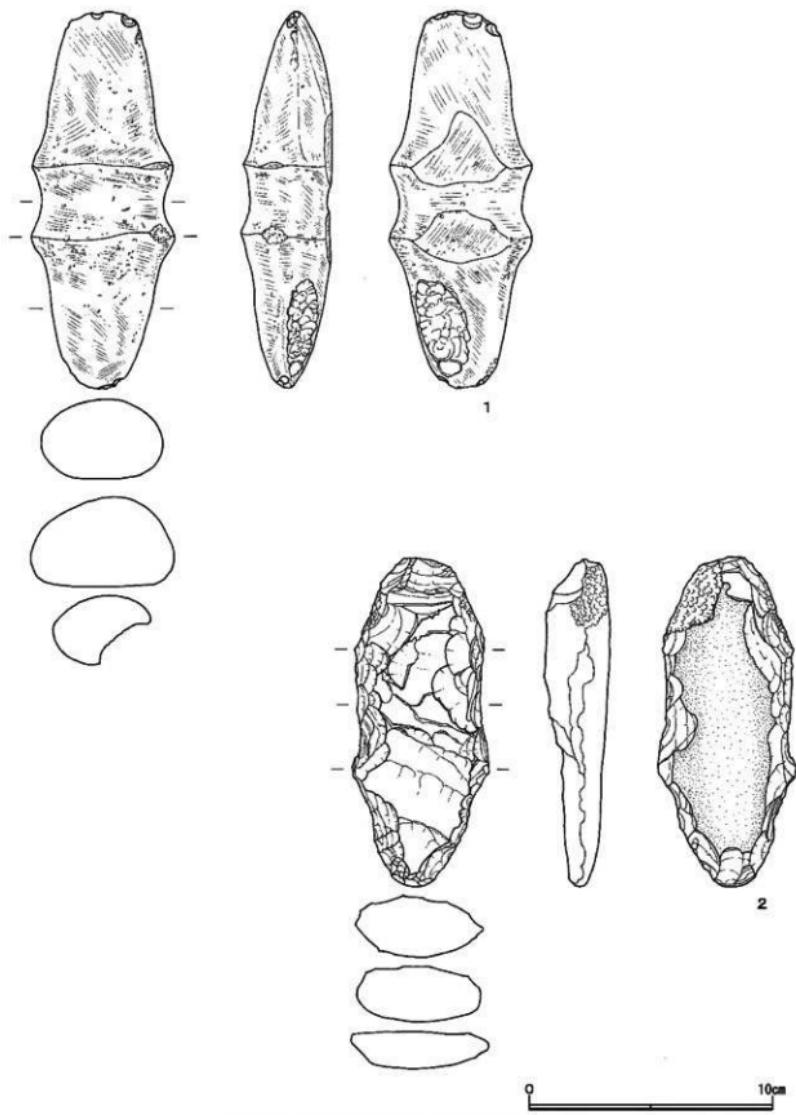
形態は縦断面形が扁平気味で、全体形状が三日月形の独鉛石である。中央部の抉り部と隆起部は、正面と背面および一方の側面に顕著につくり出されている。特に、一方の側面の隆起部は隆起部間が拡がりながら外に張り出すように顕著である。反対側の側面には浅い抉り部と僅かな隆起部が認められる程度であり、明瞭な抉り部と隆起部はつくり出されていない。抉り部と隆起部の横断面形は、一方の側面が平坦となる二等辺三角形をふくらました様な形状である。両端部は、先端部へいくほど先細になるとともに扁平となる。整形は、抉り部の一部に製作時の斑点状の敲打痕が認められるが、その部位を除きほぼ器面全体が丁寧な研磨により仕上げられている。両先端部は先端にいくほど厚みが薄くなり、鋭く丁寧に研磨されるとともに僅かな磨耗度が認められる。その他、器面全体に被熱による変色が認められ、被熱痕が顕著である。石材は、変質閃緑斑岩である。なお、計測値等は第3表に記載している。

26 三直貝塚a・b (第3図-1・2、写真図版5)

三直貝塚は、北側に東京湾に注ぐ畠沢川によって開析された支谷と、南側に東京湾に注ぐ小糸川のよって開析された支谷に挟まれた標高約96~99mの台地上に所在する縄文時代後・晚期の点列貝塚である。独鉛石は、1999(平成11)年から2001(平成13)年に財団法人千葉県文化財センターにより発掘調査が実施された調査区から出土したものである(吉野 2006)。本稿では2006年に報告された1点と、2008(平成20)年に小澤が行った再調査により打製独鉛石と判明した1点の計2点を再実測し、報告する。

26-a (第3図-1、写真図版5)

SI-009遺物集中地点から石棒頭部片、砥石、敲石、磨石、磨製石斧片、円形土製品、土製耳飾などとともに出土した独鉛石である。形態は、縦断面形が扁平で両端部の長さがほぼ同じ上下対称である。中央部の抉り部は全周するが、正面と背面の抉り部は浅く両側面が深く抉られている。隆起部は正面と背面の高まりが僅かであるが、両側面の隆起部は外に張り出すように顕著である。抉り部ならびに隆起部の横断面形は扁平な梢円形で、両端部の厚みは先端部へいくほど薄くなる。整形は、抉り部から隆起部ならびに端部など器面全体を丁寧な研磨により仕上げ、背面の隆起部に研磨による平坦面がつくり出されている。この平坦面は、佐倉市岩富上ノ袖東遺



第3図 千葉県内出土の独鉛石実測図 (3)
1-2 君津市三直貝塚出土 (26-a・b)

跡出土の独鉛石(11-a)や木更津市大山台遺跡出土の独鉛石(43-a)に認められる平坦面と同様の形態的特徴がある(小澤 2009、2010)。また、一方の端部には数度にわたる打撃により形成された直径約4.2×2.4cm、深さ約0.5～0.6cmの凹痕が1箇所ある。そのほか両先端部には、それぞれ数度の弱い打撃による剥離痕が認められ、小さな剥離面がある。石材は、変質閃緑斑岩である。なお、計測値等は第3表に記載している。

26-b (第3図-2、写真図版5)

発掘調査報告書では打製石斧として報告している(吉野 2006)が、SI-029堅穴住居跡から出土した打製独鉛石である。SI-029堅穴住居跡は入口施設を備えており、独鉛石のほかに石棒、石剣、砥石、敲石、磨石、石鎌、石製玉類、円形土製品、土製耳飾片などが出土している。

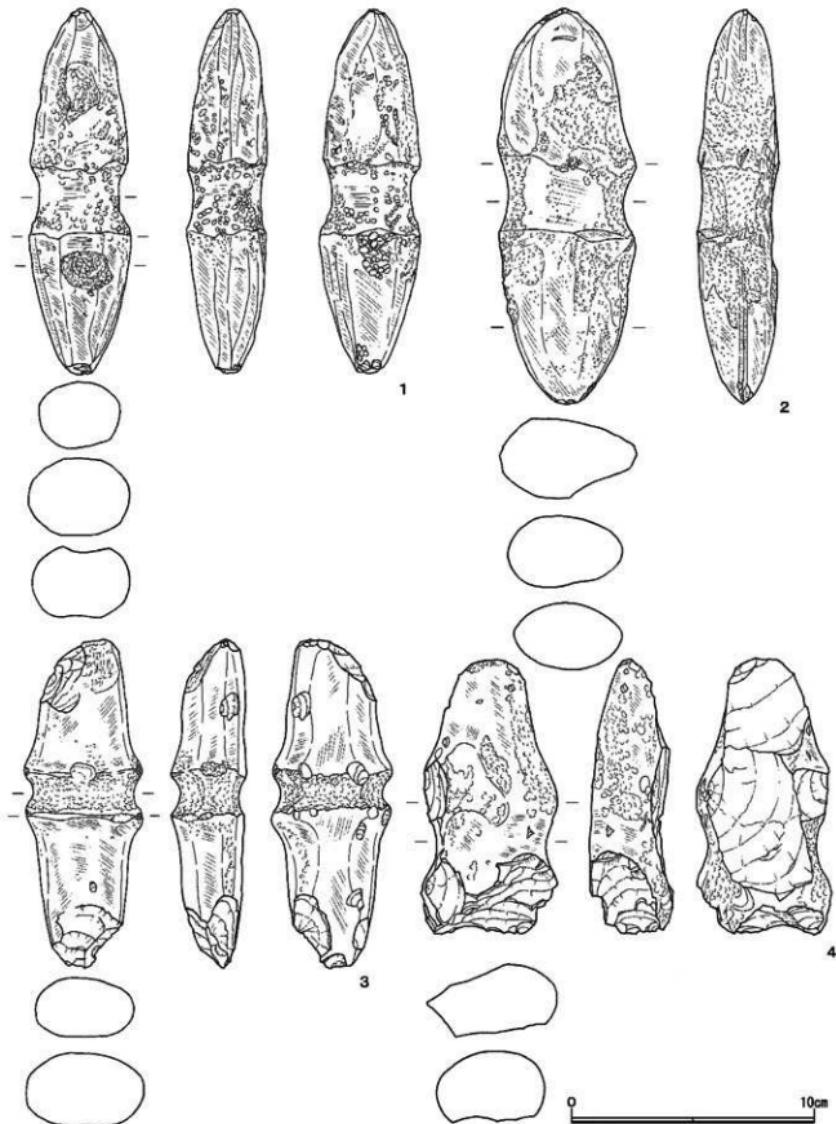
形態は縦断面形が扁平で、端部の長さが隆起部間とほぼ同じ打製独鉛石である。扁平な縦長の礫を素材としており、背面の大部分に平滑な自然礫面を残している。整形は、扁平な礫を直接打撃による剥離技法によって中央部の抉り部と隆起部や両端部をつくり出し、両側面や先端部を直接打撃による剥離調整によって仕上げ、両側面の一部には、斑点状の敲打痕も認められる。正面と背面の抉り部と隆起部は不明瞭であるが、両側面の抉り部は浅いが明瞭に抉られ、両側面の隆起部は外に張り出すように顕著である。その他、欠損がない端部の先端部には磨耗痕が顕著で、約1.6×0.7cmの範囲に磨耗面が認められる。一方の端部の先端には、強い打撃による剥離痕が顕著である。基本的に仕上げも含めて打製である。石材は、砂岩である。なお、計測値等は第3表に記載している。

なお、今のところ千葉県内出土の打製独鉛石は、この三直貝塚出土の1点の他に吉見台遺跡出土の1点(9-b)、松戸市貝の花貝塚出土の2点(1-a・b)、千葉市内野第1遺跡出土の1点(37-f)の計5点がある他、一部に研磨調整痕が認められるものの扁平で基本的に直接打撃により整形されている印西市馬場遺跡出土の1点(7-b)、佐倉市井野長割遺跡出土の1点(8-a)、千葉市椎名崎遺跡出土の1点(32-b)、同押元貝塚出土の1点(34-a)の計4点を加えると、合計9点である。

27 山野貝塚a (第4図-1、写真図版5)

山野貝塚は、東京湾へ注ぐ小櫃川の下流域右岸、標高約35～36mの台地上に所在する馬蹄形貝塚である。貝層は、東西約140m×南北約110mの範囲に分布し、東貝層と西貝層の相弧状に分布する。遺跡から出土する土器は後期前半から晩期前半までだが、貝層から出土する土器は壙之内式から安行2式までであり、貝層の形成時期は後期を主体とする。遺跡の所在は古くから知られており、これまでに本格的な発掘調査は、1973(昭和48)年に東京電力が事業主体となり財団法人千葉県都市公社が実施した調査と、1992(平成4)年に千葉県教育委員会が事業主体となり財団法人千葉県文化財センターが実施した2回の調査がある(袖ヶ浦市 1999)。独鉛石は、1973(昭和48)年に財団法人千葉県都市公社が実施した調査区のD75グリッドから出土した(野村・千葉・西山 1973)。本稿では、この独鉛石について再調査ならびに再実測し、報告する。

形態は、両端部の長さがほぼ同じ上下対称形の独鉛石である。縦断面形はやや扁平化の兆しが見られるが、基本的に厚みがある。両端部の最大径部位は、抉り部と端部の境付近にある。抉り部は明瞭に全周し、横断面形は梢円形である。両端部は、先端部へいくほど細くなる。整形は中央部の抉り部周辺に、製作時の斑点状の敲打痕が認められる。抉り部を含めた器面全体に研磨による擦痕が顕著であり、敲打による整形後、器面全体をやや粗い研磨により仕上げている。なかでも、特に両端部は良く研磨され、研磨による稜線が明瞭である。その他、一方の端部に凹部状の凹痕が1箇所と、その裏側に数度にわたる打撃による凹痕がある。また、両先端部に磨耗痕が認められる他、一方の先端部には弱い打撃による剥離痕が認められ、小さな剥離面がある。石材は、緑色岩である。な



第4図 千葉県内出土の独鉛石実測図(4)
1 桜ヶ浦市山野貝塚出土(27-a) 2 市原市祇園原貝塚出土(29-a)
3・4 千葉市椎名崎遺跡出土(32-a・b)

お、計測値等は第3表に記載している。

29 神園原貝塚a（第4図-2、写真図版6）

祇園原貝塚は、東京湾に注ぐ養老川の右岸に広がる台地に樹枝状に開析された小支谷の西側、標高約20～27mの台地上に所在する。貝層の形成時期は、後期初頭（称名寺式期）から晩期前葉（安行3b式期）である。独鉛石は、上総国分寺台区画整理事業に伴い、1977（昭和52）年から1983（昭和58）年にかけて上総国分寺台遺跡調査団が実施した発掘調査の1977（昭和52）年の第1次調査区D 3-48グリッドの遺物包含層から出土した（忍澤1999）。本稿では、この独鉛石について再調査ならびに再実測し、報告する。

形態は、両端部の長さがほぼ同じ上下対称形の独鉛石で、縦断面形は厚みが薄く扁平である。抉り部は全周するが、正面と背面が浅く不明瞭で、両側面の抉り部は深く抉られ頗著である。両端部の最大径部位は、抉り部と端部の境付近にある。隆起部は正面と背面の高まりが不明瞭であるが、両側面の隆起部は張り出すように頗著である。抉り部と隆起部の横断面形は扁平な梢円形であり、両端部の厚みは先端部へいくほど薄くなる。整形は、抉り部の両側面から隆起部および端部にかけての器面に製作時の斑点状の敲打痕が頗著であり、正面の抉り部から端部にかけて粗い研磨による仕上げとなっている。背面の抉り部周辺には、製作時の剥離痕および敲打痕が頗著である。両端部の両側面は、丁寧な研磨による穂線が明瞭である。そのほか両先端部に、それぞれ敷度の弱い打撃による剥離痕が認められ、小さな剥離面がある。石材は、変質玄武岩である。なお、計測値等は第3表に記載している。

32 椎名崎遺跡a・b（第4図-3・4、写真図版6）

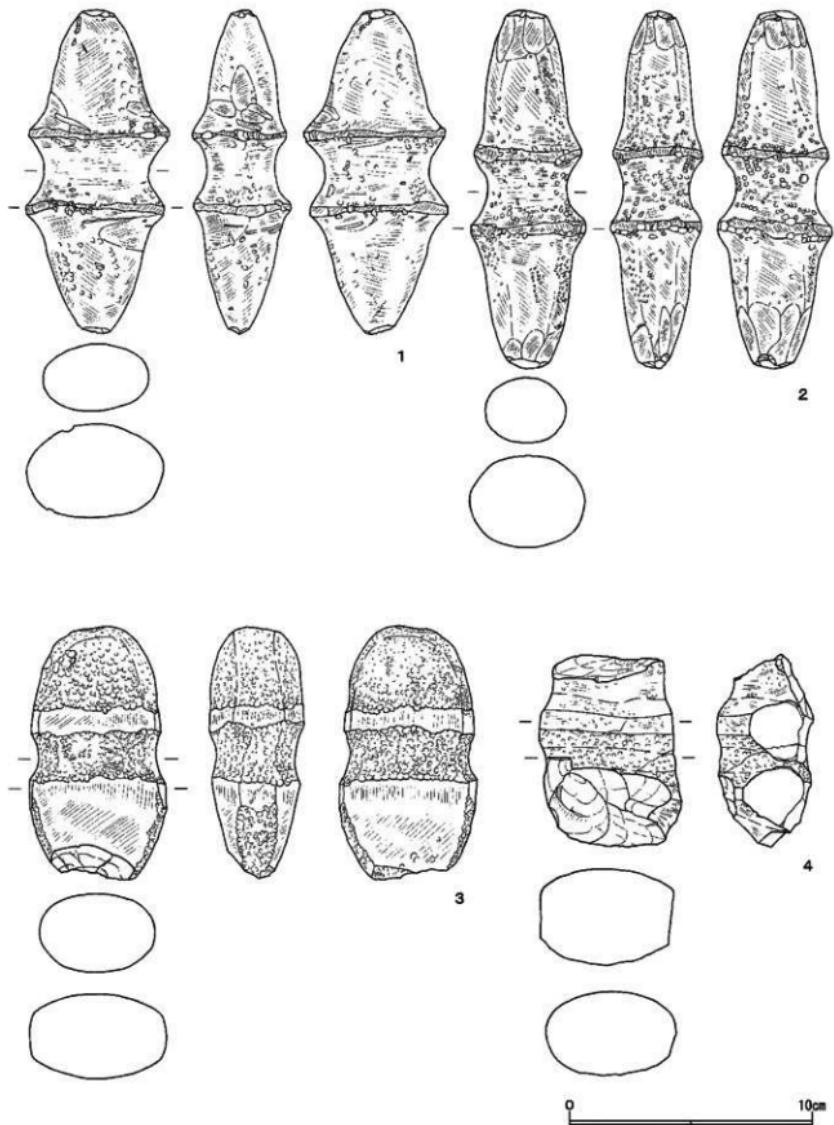
椎名崎遺跡は、東京湾に注ぐ村田川の右岸、泉支谷と椎名寺谷に挟まれた標高約26～30mの舌状台地上に所在する。独鉛石は、「台地の東端に属する豊穴住居址群の周辺より2点表面採集された」（栗本・上村 1979）ものであるが、出土した縄文土器が極めて少量であることと、表面採集の地点も「周辺より」といった広い範囲を含む可能性の記述が見られることから、椎名崎遺跡の東側に所在した椎名崎貝塚の遺跡範囲に含まれる可能性について検討する必要があると思われる（?）。本稿では、この独鉛石について再調査ならびに再実測し、報告する。

32-a（第4図-3、写真図版6）

形態は、縦断面形が扁平で両端部の長さがほぼ同じ上下対称形の独鉛石である。中央部の抉り部は、深く抉られ全周する。隆起部は抉り部と端部の境にあり、正面と背面に比べ両側面では張り出すように頗著である。隆起部間の長さは、比較的短い。抉り部と隆起部の横断面形は、扁平な梢円形である。整形は抉り部に製作時の斑点状の敲打痕が頗著であるが、隆起部と端部を丁寧な研磨により仕上げている。背面の隆起部から端部にかけて、研磨による平坦面が認められる。両先端部には、それぞれ敷度の強い打撃による剥離痕が頗著であり、大小の剥離面が認められる。石材は、変質閃綠輝岩である。なお、器面に取り上げ時にいたと思われる新しい損傷が見られたため、それ等の傷については実測図には省略した。計測値等は第3表に記載している。

32-b（第4図-4、写真図版6）

形態は、一方の端部が強い打撃により折損しているが、縦断面形が扁平の打製独鉛石である。中央部の抉り部は、正面と背面では不明瞭であるが、両側面では深く抉られ頗著である。隆起部は、正面と背面では不明瞭であるが、両側面の隆起部は強く張り出し頗著である。抉り部と隆起部の横断面形は、扁平な梢円形である。整形は、抉り部や両側面の一部に製作時の敲打痕が認められることから、縱長の自然縫に剥離を行った後一部に敲打と粗い研磨を行い仕上げている。一方の端部と左側面の隆起部に、強い直接打撃による剥離痕が頗著であり、背面全体に大きな剥離面が見られる。石材は、砂岩である。なお、計測値等は第3表に記載している。



第5図 千葉県内出土の独鉛石実測図(5)
1・2 千葉市美地合貝塚出土(33-a・b) 3・4 袖ヶ浦市上宮田台遺跡出土(44-a・b)

33 筑地台貝塚a・b（第5図-1・2、写真図版6・7）

筑地台貝塚は、東京湾に注ぐ都川によって開析された平山支谷から北東に分岐した小支谷の谷頭の北側、標高約39～40mの台地上に所在する。貝層は、東西約120m×南北約125mの範囲に南貝層と北貝層の相弧状に分布し、縄文時代中期（加曾利EIV式期）から後期全般を経て晚期前葉（姥山式期）に形成された馬蹄形貝塚である。

独鉛石は、千葉東金道路建設事業に伴い1977（昭和52）年に財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施した際、3号住居址（090）から1点と遺物包含層から1点の計2点出土した（折原他 1978）。本稿では、この2点の独鉛石について再調査ならびに再実測し、報告する。

33-a（第5図-1、写真図版6）

3号住居址（090）の南側入口付近から石剣・石棒などと出土した独鉛石である。発掘調査報告書には、堅穴住居跡内のセクションベルトから独鉛石の約1/2が出土した出土状況を示す写真が掲載されており（折原他 1978）、近くから出土した石剣との距離や床面からの高さなどが、手に取るように理解することが可能である。報告書の第14図3号住居址（090）遺物分布図に出土ポイントが示されていたため、出土状況写真と照合しながら独鉛石と石剣・石棒などの出土ポイントを割りだした。この照合作業により、独鉛石は、床面（ローム層）より約5～6cm上の覆土下層から横位置で出土し、石剣は独鉛石から西方向約90cmのところで床面から約6～7cm上の壁際の覆土下層から同じく横位置で、頭部および主軸方向を独鉛石の方角に向けて出土していることが判った。これらの出土状況から独鉛石と石剣に何らかの共通性ならびに対応性の存在が考えられる。

形態は縦断面形が扁平で、両端部の長さが同じ上下対称形の独鉛石である。中央部の抉り部は、深く抉られ全周する。隆起部は全周するがやや雑なつくりで、正面と背面の隆起部に比べ両側面の隆起部は張り出すように顕著である。抉り部と隆起部の横断面形は扁平な梢円形であり、両端部の厚みは先端部へいくほど薄くなる。整形は、抉り部から端部の一部に製作時の斑点状の敲打痕が認められるが、器面全体を丁寧な研磨により仕上げている。その他、両先端部には磨耗痕が認められ、それぞれ数面の磨耗面がある。石材は、変質閃緑斑岩である。なお、計測値等は第3表に記載している。

33-b（第5図-2、写真図版7）

33-aが出土した3号住居址（090）の東、B85グリッドからソフトローム上面に食い込んで出土した独鉛石である。形態は、端部の長さがほぼ同じ上下対称形の独鉛石で、縦断面形はやや扁平化の兆しが見られ、やや厚みが薄くなる。中央部の抉り部は比較的深く抉られ、全周する。隆起部は雑なつくりであるが、帶状隆起状に全周する。抉り部と隆起部の横断面形は均整のとれた梢円形で、端部は先端部へいくほど細くなる。整形は、中央部の抉り部と隆起部周辺に、製作時の斑点状の敲打痕が認められる。抉り部を含めた器面全体に研磨による擦痕が顕著であり、敲打による整形後、器面全体を丁寧な研磨により仕上げている。特に、両端部の先端近くは良く研磨され、穂線が明瞭である。その他、両先端部に磨耗痕が認められ、それぞれ数面の磨耗面がある。石材は、緑色岩である。なお、計測値等は第3表に記載している。

44 上宮田台遺跡a・b・c・d（第5図-3・4、第6図-1・2、写真図版8・9）

上宮田台遺跡は、東京湾に注ぐ小櫃川の支流である猪水川に開析された小支谷が樹枝状に入り組んだ地域に、東西に細長い標高約65mの台地上に所在する。遺跡の主体は縄文時代後期から晩期の中央窪地を伴う集落遺跡で、独鉛石は首都圏中央連絡自動車道の建設事業に伴い、2002（平成14）年から2004（平成16）年まで財団法人千葉県文化財センターが実施した発掘調査により4点出土した（安井 2007、2010）。幸いにも、整理調査中

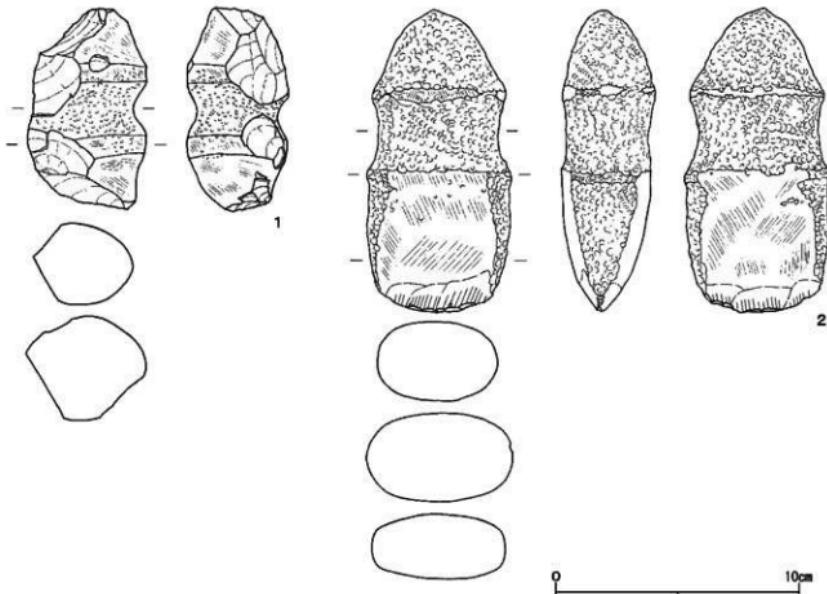
の2009(平成21)年、4点の資料を実見することができ、計測値等の一部については既に発表させていただいた(小澤 2010)。本稿では、この4点の独鉛石について再調査ならびに再実測し、報告する。

44-a (第5図-3、写真図版8)

A6-91グリッドの遺物包含層から出土したもので、磨製石斧へ転用したと考えられる独鉛石である。形態は、縦断面形が扁平で両端部の長さが異なる上下非対称形である。中央部の抉り部は、敲打により深く抉られ全周する。隆起部は正面・背面・両側面とも磨製石斧へ転用した際の研磨により平坦に削られている。上端部の一部に、削られる前の隆起部が全周していた痕跡が認められたことから、削平される前には隆起部が全周していたと考えられる。下端部は、両側面の一部を除き丁寧に研磨されている。下先端部は磨製石斧の刃部につくり変えられたが、先端部方向からの強い打撃により剥離し大きく破損している。整形は、磨製石斧に転用する際に研磨した部位を除き、残る器面全体に製作時の斑点状の敲打痕が顕著である。抉り部の横断面は独鉛石特有の梢円形であるが、下端部の横断面形は磨製石斧の基部断面形である。転用前の独鉛石は、器面全体を敲打により仕上げた上下非対称形の独鉛石と考えられる。石材は、変質閃緑斑岩である。なお、計測値等は第3表に記載している。

44-b (第5図-4、写真図版9)

B6-05グリッドの遺物包含層から出土した独鉛石である。形態は両端部を欠損しているが、残存した中央部片から、縦断面形が扁平な上下対称形と思われる。抉り部は浅いが全周し、隆起部は帯状隆起で全周する。両側面



第6図 千葉県内出土の独鉛石実測図(6)
1・2 補ヶ浦市上宮田合遺跡出土(44-a・d)

の隆起部は被熱により欠損しているが、欠損前は外に張り出すように顕著であったと思われる。抉り部と隆起部の横断面形は欠損により不明な部分があるが、基本的に扁平な橢円形である。両端部は隆起部付近から欠損しており、おそらく強い被熱などにより折損したものと思われる。整形は、抉り部から隆起部にかけて製作時の斑点状の敲打痕が顕著であるが、端部は研磨仕上げである。その他、器面は被熱により赤化し全体に被熱痕が顕著である。石材は、変質安山岩？である。なお、計測値等は第3表に記載している。

44-c (第6図-1、写真図版9)

B 6-15グリッドの遺物包含層から出土した独鉛石である。形態は両端部の一部と隆起部の一部を欠損するが、縦断面形がやや扁平で両端部の長さが同じ上下対称形の独鉛石である。抉り部は、「V」字形に深く抉られ全周する。隆起部は被熱により一部が剥離し欠損しているが、高まりが僅かな帯状隆起で全周する。抉り部と隆起部の横断面形は、やや扁平な橢円形である。両端部は先端部付近で欠損しており、おそらく被熱により剥離したものと思われる。整形は、抉り部に製作時の斑点状の敲打痕が顕著であるが、隆起部と端部は丁寧な研磨仕上げである。その他、器面全体に強い被熱痕が顕著である。石材は、変質閃緑斑岩である。なお、計測値等は第3表に記載している。

44-d (第6図-2、写真図版9)

B 7-84グリッドの遺物包含層から出土したもので、磨製石斧へ転用したと考えられる独鉛石である。形態は、縦断面形が扁平で両端部の長さが異なる上下非対称形である。中央部の抉り部は、正面と背面が浅く両側面の抉り部が深く抉られ全周する。隆起部は、正面・背面・両側面とも磨製石斧へ転用した際の研磨により一部が削られているが、削られなかった部位には明瞭に認められ、特に両側面の隆起部は張り出すように顕著である。下端部の先端部は磨製石斧の刃部につくり変えられ、研磨による錐状の穂線が認められるとともに磨製石斧として使用した際の線条痕と小さな刃こぼれがある。整形は、磨製石斧へ転用した際に研磨した部位を除き、器面全体に製作時の斑点状の敲打痕が顕著である。抉り部の横断面形は独鉛石特有の橢円形であるが、下端部の横断面形は磨製石斧の基部断面形である。磨製石斧へ転用する前の独鉛石は、器面全体を敲打により仕上げた上下非対称形の独鉛石と考えられる。石材は、変質ドレライトである。なお、計測値等は第3表に記載している。

45 中沢貝塚 a (第7図-1、写真図版9)

中沢貝塚は、東京湾に注ぐ真間川の支流である大柏川からさらに樹枝状に分岐した中沢支谷の右岸、標高約27～29mの台地上に所在する。貝層は南北約130m、東西約85mの範囲に6箇所に分布し、その分布は中央崖地を囲むように馬蹄形である。中沢貝塚の調査報告は、1893(明治26)年に刊行された『東京人類学会雑誌』第8巻第88号で、八木奘三郎が現地踏査および発掘調査の内容をスケッチ入りで紹介した報告が最も古い(八木 1893)。その後、戦前・戦後を通して東京から近いということもありたびたび発掘調査が行われたが、近年の宅地開発に伴う発掘調査でも独鉛石が出土したという報告はなかった。独鉛石は、1993(平成5)年に個人宅地の造成に伴う第18次調査で出土し、発掘調査報告書(犬塚他 1994)ならびに2010(平成22)年に刊行された『鎌ヶ谷市史資料編I(考古)』で、磨製石斧として報告されたものである(大内 2010)。本稿では、この独鉛石について再調査ならびに再実測し、報告する。

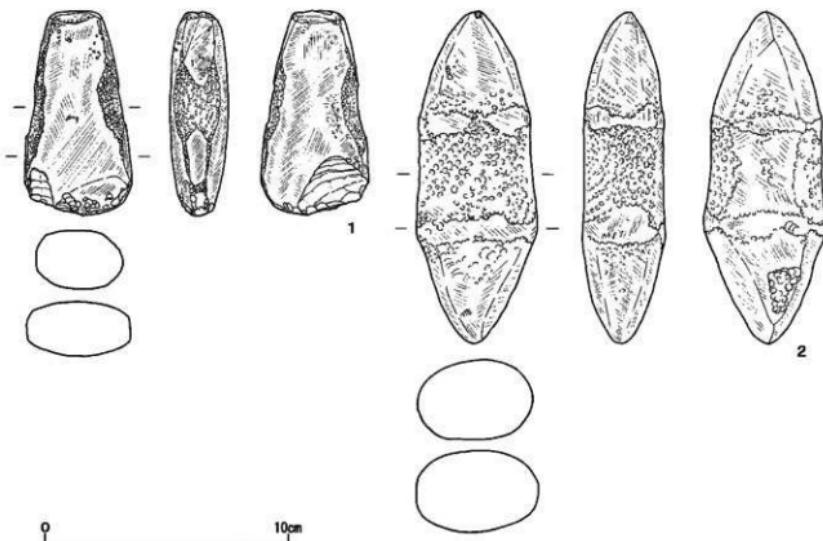
第18次調査E 8グリッドの遺物包含層から出土したもので、磨製石斧へ転用したと考えられる独鉛石である。両側面には、磨製石斧へ転用した際の研磨痕が認められるが、研磨が行き届かなかった部位に独鉛石の中央部の抉り部を製作した時の斑点状の敲打痕が顕著である。その敲打痕が磨製石斧へ転用した際の研磨痕より古いことから、独鉛石として機能していた時には抉り部が全周していたと思われる。基端部(頭部)には、磨製石斧

へ転用する前の敲打痕と転用後の研磨痕が認められる。刃部には、数度にわたる打撃による剥離痕が顕著で、小さな剥離面が多數認められる。磨製石斧へ転用した独鉛石は、内野第1遺跡出土の37-b・dと同じ縦断面形が扁平で推定全長が10cm前後の上下非対称形の独鉛石と考えられる。石材は、緑色岩である。なお、計測値等は第3表に記載している。

46 滝沢貝塚 a (第7図-2、写真図版9)

滝沢貝塚は、太平洋に注ぐ真亀川の支流である十文字川によって樹枝状に開析された滝沢支谷に面し、滝支台と呼ぶ標高約53～60mの台地上に所在する。現在の地籍は、遺跡の大部分が東金市松之郷で一部が八街市滝台地区である。滝沢貝塚に関する文献資料は少ないが、1986(昭和61)年に刊行された『竹篠論刊号』に所収された西山太郎による調査報告は、10cmコンタ測量による地形測量図と表面採集遺物の実測図版を收め、貝層の分布地点が3箇所ある点列貝塚ないし地点貝塚としている(西山 1986)。

今回、滝沢貝塚出土の独鉛石を報告するのに際し、現地踏査を行った。独鉛石は、東金市松之郷4,072番地の井口寛之氏が所有する畑から耕作中に出土したものである。現在、資料保管者は変ったが、井口氏が永年大切に保管されていたものである。遺跡の現状は大部分が畠地で、一部が県畜産センターの敷地である。井口氏所有の畠地に散布している土器片は、阿玉台式、加曾利E III・IV式、堀之内1・2式、加曾利B 1・2式、安行1・2式、安行3a・b式、姥山式、前浦式土器のほか浮線網状文が施文された土器片も見られることから、遺跡の時期は中期後半から後期全般を経て晩期後葉までである。土器片の主体は後期中葉(加曾利B 1・2式)から晩期前葉(安行3b式)であったことと、晩期前葉に比定するミミズク土偶が出土している(8)ことなどから、遺跡の主体は、後期中



第7図 千葉県内出土の独鉛石実測図(7)

1 銚ヶ谷市中沢貝塚出土(45-a) 2 東金市・八街市滝沢貝塚出土(46-a)

葉から晩期前葉にかけての時期と考えられる。

形態は、縦断面形が扁平で両端部の長さがほぼ同じ上下対称形の独鉛石である。中央部の抉り部は浅く全周し、正面と背面は僅かであるが、両側面の抉り部は明瞭である。隆起部間は約3.5～3.6cmと長く、両端部の長さとほぼ同じである。整形は、抉り部から端部にかけて製作時の斑点状の敲打痕が顕著で、両端部から隆起部にかけて研磨による擦痕が顕著である。その他、両先端部は尖頭状に研磨仕上げされ、特に剥離痕や磨耗痕は見られない。その他、一方の端部の凹部に製作時の斑点状の敲打痕が認められるが、これは三直貝塚出土の26-aや(2)で報告した向台II遺跡出土の41-aなどに見られる強い打撃による凹痕とは異なり、器面の凹みに製作時の敲打痕が研磨されずに残ったものである。石材は、変質閃緑斑岩である。なお、計測値等は第3表に記載している。

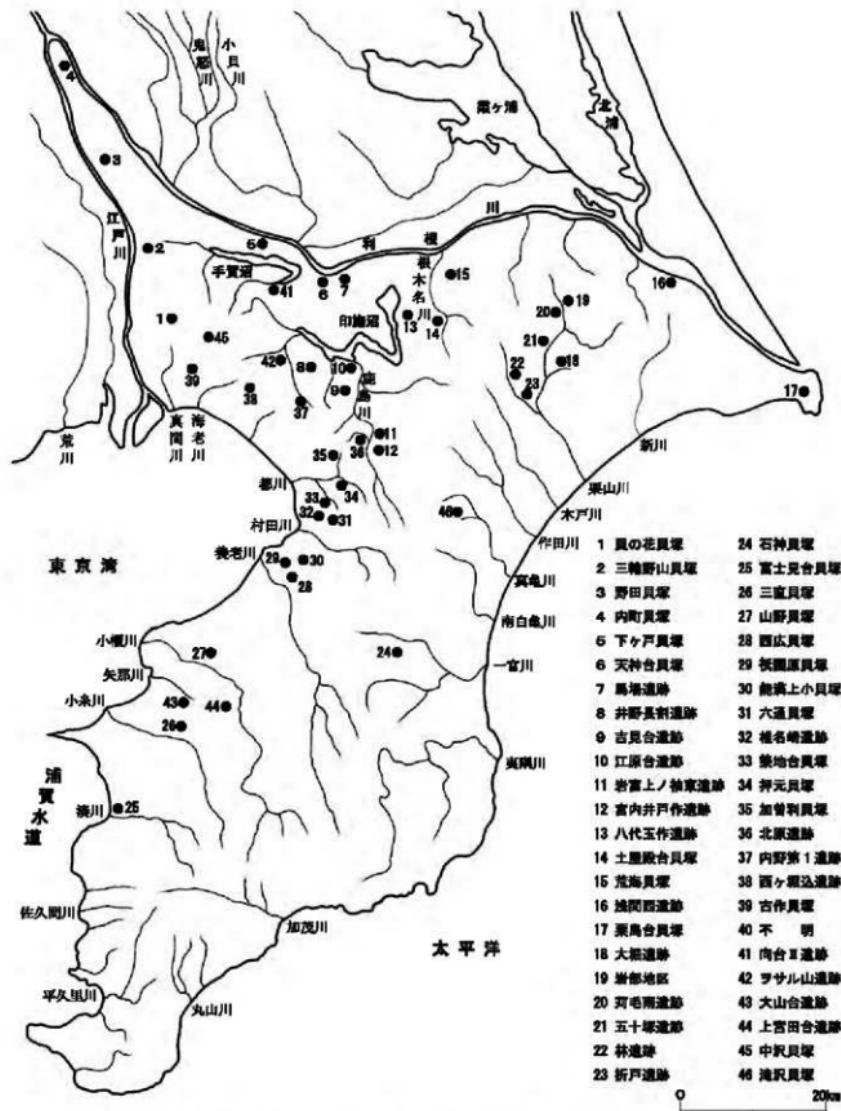
今回の(3)では、(1)・(2)に掲載した独鉛石資料の他に、既に発掘調査報告書等で報告されている資料や現在整理調査中の資料について改めて調査を行い、(1)で提案した各部位名と計測位置に基づく調査・研究方法で追加報告を行った。そして、合計46遺跡79点の調査データを、(1)・(2)の第1表 千葉県の独鉛石・独鉛石形土製品一覧表に加筆・訂正し、第3表に掲載した。

2 千葉県の独鉛石・独鉛石形土製品出土累積数

千葉県における独鉛石資料の累積は、1884(明治17)年に東京帝国大学が作成した目録(University of Tokio 1884)に掲載されていた千葉市押元貝塚出土の独鉛石(34-a)を初出とし、本稿で資料報告をした浦沢貝塚出土の独鉛石(46-a)を最新のものとする。(3)ではその累積を、第1表 千葉県内出土独鉛石・独鉛石形土製品累積表に示した。また併せて、その累積の状況が一目で解るように、第9図 千葉県内出土独鉛石・独鉛石形土製品累積図を作成した。

千葉県内最初の独鉛石である千葉市押元貝塚出土の34-aは、現在、東京大学総合研究博物館に収蔵され、収蔵番号は4767番である。資料には「506」の朱書の遺物番号が記されるとともに、「下總國千葉郡上坂尾村」と墨書きされている。この朱書の遺物番号については、東京大学総合研究博物館による調査が行われ、朱書の遺物番号は1884(明治17)年の目録作成に際して付けられたことが判明している(初鹿野・山崎・諫防 2006)。1884(明治17)年の目録には、「506. Stone implements (from K. Kato) 3. Sakaomura, Chiba Co, Chiba」(University of Tokio 1884)と記載されており、この「506」と朱書きされた独鉛石のことである。出土地である「下總國千葉郡上坂尾村」の墨書きについては、2008(平成20)年に小澤が資料調査を行い、この独鉛石が千葉市押元貝塚出土の打製獨鉛石であることを既に明らかにしている(小澤 2009)。

第1表から、成田市荒海貝塚の独鉛石形土製品(15-a)が出土した1960(昭和35)年を境に、発掘調査による出土資料が増加する累積状況が明らかとなった。さらに、1965(昭和40)年の千葉市加曾利貝塚出土の独鉛石(35-b)は、1964(昭和39)年に実施した加曾利南貝塚のトレンチ調査に引き続き、加曾利南貝塚第11区として発掘調査を実施した中央産地の晩期遺物包含層から出土したものである。第1表と第9図から、それまでは資料のほとんどが採集資料であったが、この頃から本格的な発掘調査による資料が一気に増加して行く状況が理解できよう。これ等のなかでも特に、1972(昭和47)年の市原市西広貝塚調査(第1次)による4点(28-a・b・c・d)の出土や1981(昭和56)年と1999(平成11)年の我孫子市下ヶ戸貝塚調査による4点(5-a・b・c・d)の出土、1983(昭和58)年の成田市土屋殿台貝塚調査による3点(14-a・b・c)の出土、1996(平成8)年の千葉市内野第1遺跡調査による6点(37-a・b・c・d・e・f)の出土、2003(平成15)年の袖ヶ浦市上宮田台遺跡による4点(44-a・b・c・d)の出土、

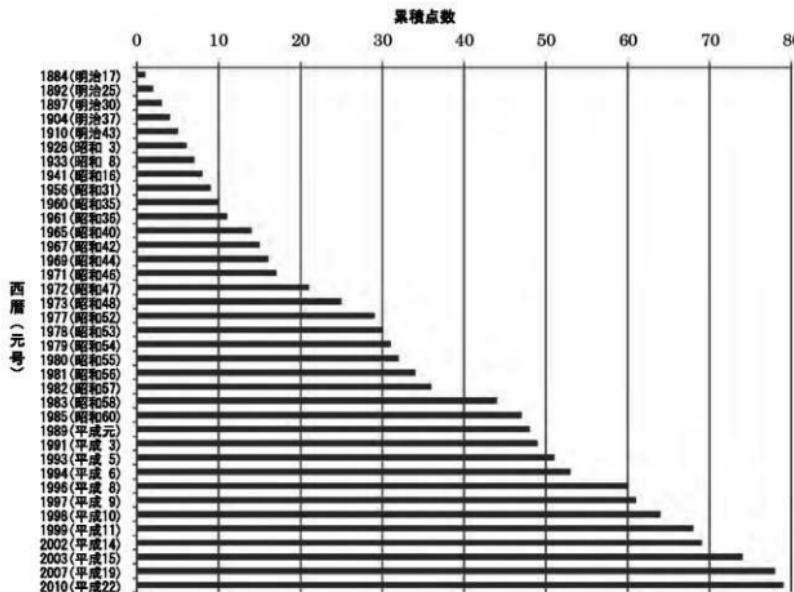


第8図 千葉県の独鉱石・鉱物石形土製品出土遺跡分布図(小澤 2009, 2010に加筆)

第1表 千葉県内出土独鈷石・独鈷石形土製品累積表

西暦	元号	遺跡番号	遺跡名	所在 地	遺物記号	累積点数
1884	明治17年	34.那智貝塚	千葉市若葉区大吉町(日・千葉市大吉町字博元)	a	1	
1892	明治25年	31.六浦三日月	千葉市若葉区六浦みち中央(日・千葉市小金井(六浦))	a	2	
1897	明治30年	39.古賀貝塚	千葉市若葉区六浦11-2丁目(日・千葉市若葉町字東原)	a	3	
1904	明治37年	20.丸子古墳群	千葉市若葉区(日・丸子古墳群(丸子古墳))	a	4	
1910	明治43年	19.岩瀬貝塚	千葉市若葉区(日・岩瀬貝塚(岩瀬))	a	5	
1928	昭和 3年	25.富士見貝塚	千葉市若葉区富士見	b	6	
1933	昭和 8年	17.黒島台貝塚	千葉市若葉区小野町(黒島町)	a	7	
1941	昭和16年	35.加賀利貝塚	千葉市若葉区加賀利8丁目(日・千葉市若葉区若葉町)	a	8	
1956	昭和21年	11.岩高上ノ原遺跡	佐倉市岩高上ノ原	a	9	
1960	昭和25年	6.天神台貝塚	印旛郡印旛村(日・印旛郡印旛町竹崎字天神台)	a	10	
1961	昭和26年	15.荒浜貝塚	成田市荒浜(日・荒浜)	a	11	
1965	昭和40年	35.加賀利貝塚	千葉市若葉区坂木8丁目(日・千葉市若葉区坂木町)	b	12	
1965	昭和40年	11.貝の花貝塚	松戸市小金井5-6丁目(松戸市八ヶ崎(貝の花))	b	13	
1965	昭和40年	11.貝の花貝塚	松戸市小金井5-7丁目(松戸市八ヶ崎(貝の花))	b	14	
1967	昭和42年	25.富士見貝塚	千葉市若葉区坂木(日・千葉市若葉区坂木)	a	15	
1969	昭和44年	23.折戸遺跡	千葉市若葉区山田(折戸)	a	16	
1971	昭和46年	13.八代三作遺跡(Loc 39遺跡)	成田市三作(日・成田市南八代字内花)	a	17	
1972	昭和47年	28.西広貝塚(1次)	市原市西広6丁目(日・市原市西広字上ノ原)	a	18	
1972	昭和47年	28.西広貝塚(2次)	市原市西広6丁目(日・市原市西広字上ノ原)	b	19	
1972	昭和47年	28.西広貝塚(3次)	市原市西広6丁目(日・市原市西広字上ノ原)	c	20	
1972	昭和47年	28.西広貝塚(4次)	市原市西広6丁目(日・市原市西広字上ノ原)	d	21	
1973	昭和48年	9.吉田合遺跡	佐倉市吉田合(日・吉田合)	a	22	
1973	昭和48年	9.吉田合遺跡	佐倉市吉田合(日・吉田合)	b	23	
1973	昭和48年	24.石川貝塚	佐原市石川(日・佐原町石川)	a	24	
1973	昭和48年	27.山根貝塚	津々浦市山根(日・津々浦町山根)	a	25	
1977	昭和52年	32.尾之内貝塚	千葉市若葉区尾之内(日・千葉市若葉区尾之内)	a	26	
1977	昭和52年	32.尾之内貝塚	千葉市若葉区尾之内(日・千葉市若葉区尾之内)	b	27	
1977	昭和52年	33.鶴崎古墳	千葉市若葉区鶴崎(日・千葉市若葉区鶴崎)	a	28	
1977	昭和52年	33.鶴崎古墳	千葉市若葉区鶴崎(日・千葉市若葉区鶴崎)	b	29	
1978	昭和53年	36.北原遺跡	千葉市若葉区北原(日・千葉市若葉町北原)	a	30	
1979	昭和54年	10.江合貝塚	佐原市白井町宇田(日・千葉市若葉町宇田北原)	a	31	
1980	昭和55年	40.中島貝塚	市原市内(日・中島)	a	32	
1981	昭和56年	51.下ヶ谷貝塚(下ヶ谷戸遺跡)	佐倉市下ヶ谷戸(日・佐倉市下ヶ谷戸)	a	33	
1981	昭和56年	51.下ヶ谷貝塚(下ヶ谷戸遺跡)	佐倉市下ヶ谷戸(日・佐倉市下ヶ谷戸)	b	34	
1982	昭和57年	18.朝日貝塚	夷隅郡朝日町(日・夷隅郡朝日町)	a	35	
1982	昭和57年	47.ラザカル貝塚	八千代市中央の原7丁目(日・八千代市大和町新田字ラザカル)	a	36	
1983	昭和58年	31.野田貝塚(第3次)	霞ヶ浦市野田(日・霞ヶ浦市野田)	b	37	
1983	昭和58年	4.円筒形土器	霞ヶ浦市白井町宇田(日・霞ヶ浦市白井町宇田)	a	38	
1983	昭和58年	14.十日町貝塚	霞ヶ浦市十日町(日・霞ヶ浦市十日町)	a	39	
1983	昭和58年	14.十日町貝塚	霞ヶ浦市十日町(日・霞ヶ浦市十日町)	b	40	
1983	昭和58年	14.十日町貝塚	霞ヶ浦市十日町(日・霞ヶ浦市十日町)	c	41	
1983	昭和58年	29.武藏貝塚	市原市武藏区合谷7丁目(日・市原市武藏字武藏)	a	42	
1983	昭和58年	30.御前上小原遺跡	市原市御前上小原(日・市原市御前上小原)	a	43	
1983	昭和58年	30.御前上小原遺跡	市原市御前上小原(日・市原市御前上小原)	b	44	
1985	昭和60年	18.大原遺跡	夷隅郡今治町(日・夷隅郡今治町)	a	45	
1985	昭和60年	21.五十嵐遺跡	夷隅郡今治町(日・夷隅郡今治町)	a	46	
1985	昭和60年	22.林貝塚	夷隅郡今治町(日・夷隅郡今治町)	a	47	
1989	平成 1年	41.向山古墳	白井市向山(日・白井市向山)	a	48	
1991	平成 3年	43.大山合遺跡	木更津市大山合字大山合	a	49	
1993	平成 5年	38.西ヶ島船岡遺跡	船橋市西ヶ島(日・船橋市西ヶ島)	a	50	
1993	平成 5年	45.中原貝塚(8次発掘)	鎌ヶ谷市中原字御山	a	51	
1994	平成 6年	9.吉田合遺跡(大井町)	佐倉市内(日・吉田合)	a	52	
1994	平成 6年	12.宮内井戸作遺跡(山地地区)	佐倉市内(日・宮内井戸作)	b	53	
1996	平成 8年	12.宮内井戸作遺跡(山地地区)	佐倉市内(日・宮内井戸作)	c	54	
1996	平成 8年	37.内井1号墓	千葉市若葉区内井1号墓(日・千葉市若葉字内井)	a	55	
1996	平成 8年	37.内井1号墓	千葉市若葉区内井1号墓(日・千葉市若葉字内井)	b	56	
1996	平成 8年	37.内井1号墓	千葉市若葉区内井1号墓(日・千葉市若葉字内井)	c	57	
1996	平成 8年	37.内井1号墓	千葉市若葉区内井1号墓(日・千葉市若葉字内井)	d	58	
1996	平成 8年	37.内井1号墓	千葉市若葉区内井1号墓(日・千葉市若葉字内井)	e	59	
1997	平成 9年	2.三輪山貝塚	夷隅郡三輪山字八幡原	a	60	
1998	平成 10年	2.三輪山貝塚	夷隅郡三輪山字八幡原	b	61	
1998	平成 10年	12.宮内井戸作遺跡(山地地区)	佐倉市内(日・宮内井戸作)	c	62	
1998	平成 10年	12.宮内井戸作遺跡(山地地区)	佐倉市内(日・宮内井戸作)	d	63	
1999	平成 1年	5.下ヶ谷貝塚(7次)	猿島子市下ヶ谷字下ヶ谷	a	64	
1999	平成 1年	5.下ヶ谷貝塚(7次)	猿島子市下ヶ谷字下ヶ谷	b	65	
1999	平成 1年	26.三庭貝塚	君津市三庭字三庭	a	66	
1999	平成 1年	26.三庭貝塚	君津市三庭字三庭	b	67	
2002	平成 4年	8.井手古墳通路	佐倉市井手(日・井手)	a	68	
2003	平成 5年	7.野田貝塚(第20次)	野田市湧水木(日・涌水木)	a	69	
2003	平成 5年	44.上宮田遺跡	猪崎市上宮田字上羽庭	a	70	
2003	平成 5年	44.上宮田遺跡	猪崎市上宮田字上羽庭	b	71	
2003	平成 5年	44.上宮田遺跡	猪崎市上宮田字上羽庭	c	72	
2003	平成 5年	44.上宮田遺跡	猪崎市上宮田字上羽庭	d	73	
2007	平成 19年	7.高砂貝塚(第5地点)	印旛郡小堀字高砂(日・印旛郡印旛町字高砂)	a	74	
2007	平成 19年	7.高砂貝塚(第5地点)	印旛郡小堀字高砂(日・印旛郡印旛町字高砂)	b	75	
2007	平成 19年	7.高砂貝塚(第5地点)	印旛郡小堀字高砂(日・印旛郡印旛町字高砂)	c	76	
2007	平成 19年	7.高砂貝塚(第5地点)	印旛郡小堀字高砂(日・印旛郡印旛町字高砂)	d	77	
2010	平成 22年	46.南ヶ丘貝塚	夷隅郡久保之町八街市地塊	a	78	

(註)採集資料のなかで出土年を特定できなかった一部の資料については、報告年ならびに資料紹介年を出土年として黒積した。



第9図 千葉県内出土独鉱石・独鉱石形土製品累積図

2007(平成19)年の印西市馬場遺跡調査による4点(7-a・b・c・d)の出土などは、発掘調査による出土資料を一気に増加させることとなった。こうして、2010(平成22)年10月末現在、千葉県における独鉱石・独鉱石形土製品の累積数は、合計46遺跡79点⁽⁹⁾である。

3 独鉱石の形態分類ならびに変遷

独鉱石資料の型式学的な研究ならびに編年的位置づけを検討していく上で、合計46遺跡79点という資料数は決して充分とは言えないが、本稿では型式学的研究の基礎となる形態分類と編年的位置づけの基礎となる変遷の検討を通して、縄文時代後・晚期を中心とする弥生時代中期に至る千葉県内出土の独鉱石・独鉱石形土製品の地域的な特徴ならびに特色を明らかにしようとするものである。

独鉱石の形態分類は、先学諸氏によって試みられてきた。その最初の試みは、1909(明治42)年に東京人類学会雑誌に掲載された大野雲外による「独鉱石の形式分類に就て」である。そのなかで大野は「本邦諸地方の遺跡から石器類を発見する中に独鉱の形式に似たる一種の石器を発見・・・」と述べ、独鉱石を一号、二号、三号の3種類に分類し、三号としたものは独鉱石と磨製石斧との間にあるもので稀であるとした。また、打製石斧の中にも同じものがあると述べ、打製独鉱石の存在を明確に指摘した(大野 1909)。この、大野の型式学的研究の方向は、後の後藤守一や中谷治宇二郎等による石器研究、それから山内清男による分類へと繋がっていったものと思われる。これらの研究史については、1998(平成10)年の平山紋子による栃木県内出土資料の形態分類(平山 1998)までを岡本孝之がまとめている(岡本 1999)ので、ここでは特に扱わないこととする。

1998(平成10)年に栃木県内の獨鉛石資料を扱った平山の分類視点は、先ず全体形状を上下対称形と栃木県内から比較的多く出土する上下非対称形⁽¹⁰⁾を I 群と II 群に大別し、次に中央部の形状と先端部の形状を分類するという方法であった。平山の作業は分類にとどまり、その分類を変遷の検討まで進めるには至らなかつた。しかし、この平山の作業により、栃木県内出土の獨鉛石に II 群とした上下非対称形が多いという研究結果となり、栃木県内という限られた地域の特徴ならびに特色を明確にした分類方法⁽¹¹⁾は、大きな研究成果であったと思われる。このように、地域的な特徴ならびに特色を明確にし、その地域の固有性ならびに他地域との共通性を地域間で比較研究することにより、少しずつではあるがその背後に存在した確かな人間活動の実態ならびにその文化的・社会的背景の全容が解明されていくものと考える。

平山が II 群とした上下非対称形の獨鉛石は、近年、千葉県内からも出土しており(小澤 2009、2010)、千葉県内出土資料を上下非対称形が比較的多い栃木県内出土資料や群馬県内出土資料と比較研究する上で、平山の分類基準は重要と思われる。本稿では、栃木県地域や群馬県地域に比較的多く出土する上下非対称形と比較検討が可能となるよう、(2)で獨鉛石の計測値の分析を行った結果得られた特徴と属性的な共通性に基づき、先ず全体形状を I 群:上下対称形で、三日月形ではないもの及び三日月状に反らなもの(平山の I 群:左右の形状が同一のもの)と II 群:上下非対称形のもの(平山の II 群:左右の形状が異なるもの)と III 群:上下対称形で、三日月形のもの及び三日月状に反るもの、と大きく 3 群に分類した。そして次に、中央部の形状を 1 類～8 類に分類し、さらに先端部の形状を a 類～j 類に分類するという方法で行うこととした。分類基準は、次の通りである。

全体形状の分類

I 群:上下対称形で、三日月形ではないもの及び三日月状に反らなもの

II 群:上下非対称形のもの

III 群:上下対称形で、三日月形のもの及び三日月状に反るもの

中央部形状の分類

1 類:隆起部は明瞭でなく、抉り部は全周するが端部との境が曲線的である

2 類:隆起部は抉り部と端部の境にあって全周し、抉り部は全周し端部との境が直線的である

3 類:隆起部は全周せず両側面にのみ認められ、抉り部も全周せず両側面にのみ認められる

4 類:隆起部は全周するが高まりが僅かで明瞭な帯状隆起ではなく、抉り部は全周する

5 類:隆起部は隆起部間に広く帯状隆起で全周し、抉り部も幅広く明瞭に全周する

6 類:隆起部は隆起部間 1・2 の間隔に差が大きく一方の側面に拡がりながら顯著で、抉り部は全周する

7 類:隆起部は一方の側面にのみ顯著で全周せず、抉り部も一方の側面にのみ認められ全周しない

8 類:隆起部は顯著に全周し、抉り部は一方の側面に深く一方の側面に浅い

先端部形状の分類

a 類:円筒状で丸みを帯び、厚みがある

b 類:円筒状で丸みを帯び、a 類より厚みがなく先端部にいくほど薄くなる

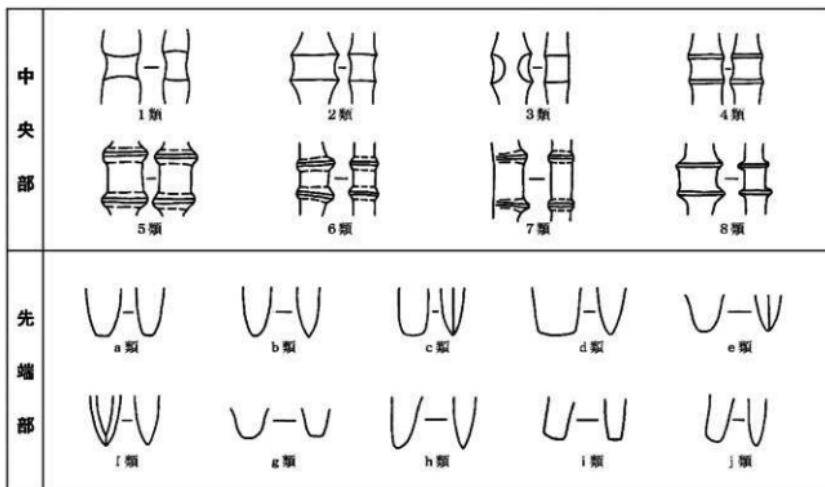
c 類:やや扁平で、石劍状である

d 類:扁平の幅広で、石斧状である

e 類:扁平の丸みがあり、側面左右に稜線がある

f 類:先端部にいくほど先細となり、鋭い

g 類:丸く鈍い



第10図 千葉県内出土独鉛石の形態分類模式図

h類:三日月形で、先端部にいくほど薄く鋭い

i類:三日月状に反り、厚みがあり角棒状である

j類:三日月状に反り、厚みが無く石劍状である

以上の分類基準により得られた分類の結果を、第3表の形態分類の項目に示した。

千葉県内出土の独鉛石は、成田市荒海貝塚出土の独鉛石形土製品(15-a)を除き、そのほとんどが使用石材を産出する地域の製作遺跡で完成品として製作され、千葉県内の集落遺跡に搬入されたものである。言い換れば、製作遺跡から完成品として千葉県内の集落遺跡に供給されたものである。よって、製作遺跡を包括した岩石種群という単位ならびに系列別に形態的特徴を分類・整理することにより、全体の形態変化の変遷が追えるのではないかと考えた。縦系列として緑色岩群、変質閃緑斑岩類群(グリーンタフ変質地帯の岩石も含む)、頁岩群、ホルンフェルス群、安山岩群、角閃岩群、その他の7群に分類し、横系列として形態分類の結果を基にⅠ期～Ⅷ期に分類した。そして磨製独鉛石と独鉛石形土製品(12)の変遷を検討し、第11図 千葉県内出土の独鉛石・独鉛石形土製品変遷図(1)・(2)にその変遷を示した。

なお、打製独鉛石については、まだ変遷を検討できるほど充分な資料数ではなく時期尚早と思われるため、別に扱うこととした。分類方法は、縦系列として岩石種群別に砂岩群、安山岩群、点紋綠泥片岩群、ホルンフェルス群、その他の5群に分類し、横系列として岡本孝之が示した分類(岡本 2003, 2004)に従って矢野下型・札地型の2型式(13)に分類し、第12図 千葉県内出土の打製独鉛石分類図を作成した。

I期

緑色岩群に、三輪野山貝塚172号住居跡出土の2-bがある。172号住居跡は柄鏡形住居であり、出土土器から称名寺II式期に比定される(小栗・小川・宮川 2008)。2-bは全体形状がずんぐりした上下対称形のI群で、中

央部形状は 1 類、先端部形状は a 類である。形態分類は、I 群 1-a 類とした。整形は研磨仕上げである。出土状況は東縦地 MHB 3-172 号住居跡の床面から約 7 cm 上の覆土 1 層と 2 層の境から出土したものである。覆土中から出土した独鉛石は、住居の時期とは若干の時間差がある可能性は否定できないが、出土状態からそれほどあるとは思われない。172 号住居跡出土の磨製独鉛石(2-b)は、流れ込み資料と考えれば竪穴住居の時期よりさらに遡り古くなるし、竪穴住居廃棄に伴うものと考えれば三輪野山貝塚の集落が最も拡大した堀之内 1 式期という可能性もある。整理調査中でもあり即断は控えるが、称名寺 II 式期から集落が最も拡大した堀之内 1 式期に比定されるものと考えるのが、最も自然であろう。いずれにせよ、後期前葉であることには間違いない。今のところ千葉県内出土の独鉛石のなかで、最古の独鉛石である。I 期は、縄文時代後期前葉に比定される。

II 期

緑色岩群に、山野貝塚出土の 27-a がある。整形は敲打後に粗い研磨による仕上げを行い稜線が顕著で、全体的にすんぐりし銳さに欠ける。全体形状は上下対称形の I 群で、中央部形状は 1 類、先端部形状は a 類である。形態分類は、I 群 1-a 類とした。変質閃緑斑岩類群に、内野第 1 遺跡出土の 37-d と吉見台遺跡出土の 9-a がある。内野第 1 遺跡出土の 37-d の全体形状は上下非対称形の II 群で、中央部形状は 1 類、先端部形状は a 類である。形態分類は、II 群 1-a 類である。37-b と同じく、全体的に銳さに欠ける。吉見台遺跡出土の 9-a は、全体形状が上下対称形の I 群で、中央部形状は 2 類、先端部形状は a 類としておく。形態分類は、I 群 2-a 類としたが、両端部の太さにかなりの差があるので II 群に入る可能性もあり、現時点では I 群と II 群の両群の要素があるものと捉えておきたい。2 点とも全体的にすんぐりしており、銳さに欠ける。頁岩群に、ヲサル山遺跡出土の 42-a がある。整形は敲打後に粗い研磨による仕上げを行い稜線が顕著で、先端部はやや扁平の石劍状である。全体形状は上下対称形の I 群で、中央部形状は 1 類、先端部形状は c 類である。形態分類は、I 群 1-c 類とした。宮内井戸作遺跡出土の 12-d もヲサル山遺跡出土の 42-a と同じく、I 群 1-c 類としてよいと思われる。II 期は、縄文時代後期中葉に比定される。

III 期

緑色岩群に、内野第 1 遺跡出土の 37-b がある。整形は敲打後に端部を粗い研磨による仕上げを行い、全体的にすんぐりし銳さに欠ける。全体形状は上下非対称形の II 群で、中央部形状は 1 類、先端部形状は a 類である。形態分類は、II 群 1-a 類とした。変質閃緑斑岩類群に、宮内井戸作遺跡出土の 12-a と北原遺跡出土の 36-a、林遺跡出土の 22-a がある。宮内井戸作遺跡出土の 12-a は全体形状が上下対称形の I 群で、中央部形状は 2 類、先端部形状は a 類である。形態分類は、I 群 2-a 類とした。天神台貝塚出土の 6-a も I 群 2-a 類である。II 期の吉見台遺跡出土の 9-a の系統で、やや扁平化している。林遺跡出土の 22-a は全体形状が上下非対称形の II 群で、中央部形状は 2 類、先端部形状は a 類である。形態分類は、II 群 2-a 類とした。II 期の内野第 1 遺跡出土の 37-d の系統である。北原遺跡出土の 36-a の全体形状は上下対称形の I 群で、中央部形状は 2 類、先端部形状は b 類である。形態分類は、I 群 2-b 類とした。全体的に銳さに欠ける。古作貝塚出土の 39-a はスケッチがあるだけで岩石種の判定が困難であるが、形態分類は北原遺跡出土の 36-a と同じ I 群 2-b 類と思われる。頁岩群に、内野第 1 遺跡出土の 37-a や宮内井戸作遺跡出土の 12-b がある。内野第 1 遺跡出土の 37-a は、II 期のヲサル山遺跡出土の 42-a と同じく、両端部に研磨の稜線が顕著で全体的に銳さに欠ける。全体形状は上下対称形の I 群で、中央部形状は 4 類、先端部形状は a 類である。形態分類は、I 群 4-a 類とした。宮内井戸作遺跡出土の 12-b は中央部形状が異なり III 期のなかでは II 期に近いものであり、I 群 1-a 類と思われる。III 期の特徴は、中央部形状が 1 類・2 類・4 類であるが、先端部形状が a 類と b 類という共通性がある。このように、III 期に入ると II 群とした上下非対称形のものが変

質閃綠斑岩類群に出現し、I群ならびにII群の縦断面形や横断面形に、次のIV期に盛行する扁平タイプの兆しが見られるのもIII期の特徴である。III期は、縄文時代後期後葉に比定される。

IV期

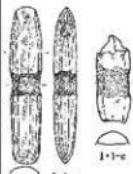
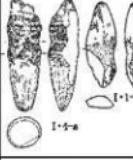
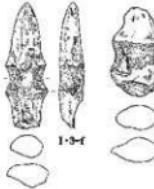
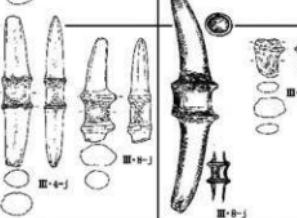
獨鈎石はIV期に最も多く出土し、なかでも特に、三輪野山貝塚出土の2-a、下ヶ戸貝塚出土の5-a、馬場遺跡出土の7-a、三直貝塚出土の26-a、築地台貝塚出土の33-a、加曾利貝塚出土の35-bの6点は、時期が明確な遺構や遺物包含層からの出土であり、IV期の基準資料である。変質閃綠斑岩類群に、馬場遺跡出土の7-aがある。全体形状は、栃木県内や群馬県内の遺跡から比較的多く出土する大型の上下非対称形のII群である。中央部形状は隆起部が帯状隆起で全周する5類で、先端部形状は扁平の幅広で石斧状のd類である。形態分類は、II群5-d類とした。上宮田台遺跡出土の44-dは馬場遺跡出土の7-aと比べると小型であるが、全体形状は上下非対称形のII群である。中央部形状は転用に際し研磨による改変を行っているため明確ではないが、隆起部と抉り部は全周していたと思われ、4類とした。先端部形状は幅広の石斧状で、d類である。形態分類は、II群4-d類とした。このほか第11図に掲載しきれなかったが、上宮田台遺跡出土の44-aも同じくII群4-d類である。この他、変質閃綠斑岩類群に富士見台貝塚出土の25-a、三直貝塚出土の26-a、築地台貝塚出土の33-aがある。三直貝塚出土の26-aは、SI-009遺物集中地点から出土したもので安行3a式期に比定される。築地台貝塚出土の33-aは、3号住居址の櫛土中から出土したもので同じく安行3a式期に比定される。全体形状は、3点とも上下対称形のI群である。中央部形状は、25-aと26-aが2類で、33-aは4類である。先端部形状は、25-aがd類、26-aと33-aがe類である。加曾利貝塚出土の35-bは、加曾利南貝塚の中央窓地の晚期遺物包含層から出土したもので、遺物包含層の時期は姥山II式期である。全体形状は三日月形のIII群で、中央部形状は隆起部と抉り部が全周する6類、先端部形状は先端にいくほど先細で薄く鋭いh類である。形態分類はIII群6-h類で、岩富上ノ袖東遺跡出土の11-aも同形態である。このIII群6-h類の系統は大堀遺跡出土の18-aに引き継がれ、18-aは全体形状が三日月形となるIII群で、中央部形状は7類、先端部形状は先細で薄く鋭いh類である。形態分類は、III群7-h類である。岩石種も同じ変質閃綠斑岩である。この他、IV期はIII群までにはない新しい使用石材である角閃岩製の獨鈎石が出現する。土屋巣台貝塚出土の14-aである。全体形状は上下対称形のI群で、中央部形状の特徴は隆起部が顕著となる5類、先端部形状は剥離痕が顕著で不明な部分があるが、g類とした。形態分類は、I群5-g類である。IV期の特徴は、I群、II群、III群の各群が揃うほか、安山岩製やホルンフェルス製などが加わり、形態ならびに岩石種とも最もバラエティに富む。また、IV期に最も盛行したII群は、II期に出現したII群の系統を引き継ぐものであるが、次のV期には全く見られない。代わりに、IV期に出現したIII群の系統がV期に引き継がれる。この他、獨鈎石の転用例がIII期後半からIV期にかけて見られる。転用例については、まとめのところで扱うこととした。IV期は、縄文時代晚期前葉から中葉に比定される。

V期

変質閃綠斑岩類群に、IV期の加曾利貝塚出土の35-bや大堀遺跡出土の18-aのIII群の系統である折戸遺跡出土の23-aがある。全体形状は三日月状に反り、形態分類はIII群7-i類である。V期には、角閃岩群にIV期に見られた14-aと同じく、角閃岩製の獨鈎石がある。浅間西遺跡出土の16-aと苅毛南遺跡出土の20-aである。変遷図には、角閃岩群として分類し示した。2点とも全体形状が細身で三日月状に反るのが特徴で、形態分類は浅間西遺跡出土の16-aがIII群8-j類、苅毛南遺跡出土の20-aがIII群4-j類である。その他、香取市(旧・栗原町)岩部地区出土の19-aは所在不明で岩石種判定を行っていないが、形態分類は浅間西遺跡出土の16-aと同じIII群8-j類となるので、V期に分類した。このほか、V期には土製品がある。荒海貝塚出土の獨鈎石形土製品(15-a)で、形態分

緑色岩群		変質閃綠斑岩類群(グリーンタフ変質地帯の岩石も含む)									
I 期	 										
II 期	 	 									 
III 期	 	 	 	 							
IV 期											        
V 期											 

第11図 千葉県内出土の独鉛石・独鉛石形土製品変遷図（1）

頁 岩 群	ホルンフェルス群	安 山 岩 群	角 閃 岩 群	そ の 他
 I-1-a 				
 I-4-a 				
	 I-3-f 	 I-2-d 	 I-5-g 	
			 III-6-j III-8-j III-9-j 	

類はⅢ群6-j類である。V期は、全体形状が細身で三日月状に反るⅢ群で、中央部形状が4類・6類・7類・8類に分類されるものの、先端部形状が1類とj類に絞られるという形態的特徴がある。また、使用石材の岩石種がグリーンタフ変質地帯の緑色凝灰岩と角閃岩の2岩石種に絞られるという使用石材の選択的特徴と、土製品の出現が特徴である。V期は、縄文時代晚期後葉から弥生時代中期に比定される。

以上、千葉県内出土の独鉛石の変遷を形態分類の結果を基に縦系列として岩石種群系列に分類・整理し、横系列としてⅠ期～V期に分類した。これらの分類作業の結果明らかとなった変遷を、第11図 千葉県内出土の独鉛石・独鉛石形土製品変遷図(1)・(2)に示した。

4 岩石種別出土分布

千葉県内出土の独鉛石の使用石材の岩石種判定は、東海大学非常勤講師柴田 徹氏とともに、2008(平成20)年より双眼実体顕微鏡を用いた肉眼観察に加え、非破壊でかつ多くの個体を判定できる比重計測を併用した岩石種判定法(柴田 2007, 2009)で継続して行っている。その研究成果の一部は、中間報告として既に(1)・(2)で公表している(小澤 2009, 2010)。

2010(平成22)年は、未判定資料の岩石種判定に加え過去に判定した一部の資料についても再判定をするなど判定結果の精度を上げ、その判定結果を第2表に分類・整理し掲載するとともに、第3表に岩石種⁽¹⁴⁾の項目を設け掲載した。なお、器面全体にカーボンが付着し判定不可となった千葉市押元貝塚出土の34-aについては、不明として扱った。また、判定結果については、柴田 徹氏が本紀要の別稿で詳細に報告されている。

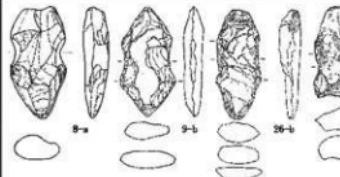
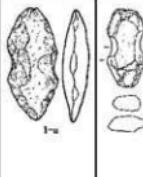
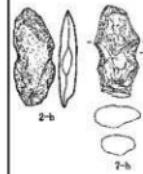
本稿では、千葉県内出土独鉛石の使用石材の岩石種判定結果を、A 緑色岩製独鉛石の出土分布、B 変質閃緑斑岩類(グリーンタフ変質地帯の岩石も含む)製独鉛石の出土分布、C ホルンフェルス製独鉛石と頁岩製独鉛石の出土分布、D 安山岩製独鉛石・多孔質安山岩製独鉛石と角閃岩製独鉛石の出土分布にそれぞれ分類・整理し、第13図 千葉県内出土独鉛石の岩石種別分布図・A・B・C・Dの各図に示した。

A図に示した緑色岩製独鉛石の分布は、流山市三輪野山貝塚、鎌ヶ谷市中沢貝塚など東京湾東岸地域を中心とした限られた範囲の集落遺跡から出土しており、出土分布に偏在性がみられる。また、緑色岩製独鉛石は第11図の変遷図を見るとⅠ期からⅢ期までの後期を中心に出土しており、他の岩石種と比べ最も早い段階に東京湾東岸地域へ搬入されたものである。

B図に示した使用石材の岩石種の中で出土数が最も多かった変質閃緑斑岩類製独鉛石の出土分布は、県北西部の野田市野田貝塚から太平洋に面した東部地域、さらに東京湾に面した県南部の富津市富士見台貝塚までの広い地域にみられる。また、変質閃緑斑岩製独鉛石はⅡ期に徐々に搬入が始まり、Ⅲ期を経てⅣ期に最も多く搬入されるが、V期には1点もみられないという変遷である。

C図に示したホルンフェルス製独鉛石の分布は、松戸市貝の花貝塚、野田市野田貝塚、我孫子市下ヶ戸貝塚、印西市馬場遺跡など県北西部地域の限られた範囲の集落遺跡から出土しており、出土分布に偏在性がみられる。頁岩製独鉛石の分布は、佐倉市宮内井戸作遺跡、八千代市ラサル山遺跡、千葉市内野第1遺跡から出土しており、3遺跡とも印旛沼水系の集落遺跡という点で共通しており、出土分布に偏在性の傾向がみられる。

D図に示した安山岩製独鉛石と多孔質安山岩製独鉛石の分布は、松戸市貝の花貝塚、流山市三輪野山貝塚、我孫子市下ヶ戸貝塚、印西市馬場遺跡、佐倉市江原台遺跡、千葉市内野第1遺跡など県北西部地域の集落遺跡から出土しており、出土分布に偏在性がみられるとともに、C図に示したホルンフェルス製独鉛石が分布する地域とほぼ重複する傾向がみられる。これらの安山岩製独鉛石やホルンフェルス製独鉛石は、栃木県北西部地域を源流

	砂 岩 群	安 山 岩 群	点紋隕石片岩群	ホルンフェルス群	その 他
矢野下型					
札 地 型					

(註) 縮尺は、スケール6分の1に統一した。

第12図 千葉県内出土の打製独鉱石分類図

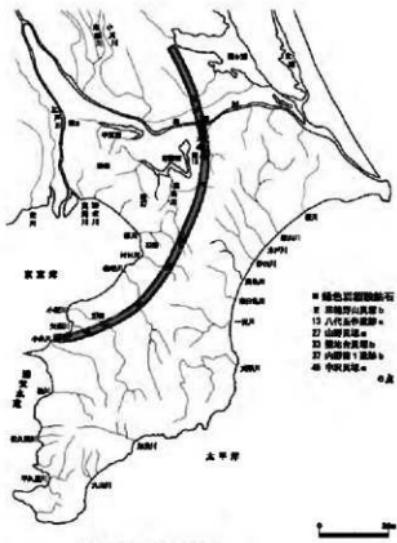
として常総台地の西側を北から南下する古鬼怒川の水系を経由し、古鬼怒湾に面した茨城県南西部地域や千葉県北西部地域に搬入されたものと考えられる。角閃岩製独鉱石の分布は、成田市土屋殿台貝塚、東庄町浅間西遺跡、香取市苅毛南遺跡など栗山川流域を南限とした県北東部地域の集落遺跡から出土しており、出土分布に偏在性がみられる。角閃岩は、周辺では茨城県と福島県の県境付近を源流として茨城県北部地域を北から南へ流れ、久慈川と合流し太平洋に注ぐ里川流域で採集可能な石材である(柴田 2005)。既に(2)でも述べたが、栗山川流域や根古名川流域である千葉県北東部地域は、里川流域から片道80 ~ 90 km程度の距離しかなく、おそらく里川流域周辺の製作遺跡で完成品にされたものが、古鬼怒湾の水系を経由し、千葉県北東部地域に搬入されたものと考えられる(小澤 2010)。

出土数が最も多かった変質閃緑斑岩類製独鉱石と比較的の出土数が多くまとまりのあった緑色岩製独鉱石、ホルンフェルス製独鉱石、頁岩製独鉱石、安山岩製独鉱石、多孔質安山岩製独鉱石、角閃岩製独鉱石の出土分布を、第13図に分類・整理し示した。その結果、変質閃緑斑岩類製独鉱石の出土分布が、県北西部の野田市野田貝塚から太平洋に面した東部地域、さらに東京湾に面した県南部の富津市富士見台貝塚までの広い地域であるのに対し、緑色岩製、ホルンフェルス製、頁岩製、安山岩製、多孔質安山岩製、角閃岩製独鉱石の出土分布に偏在性がみられた。これ等の岩石種の出土分布の偏在性は、完成品の搬入経路などを示していると考えられる。言い換えれば、製作遺跡から人々を介して県内の集落遺跡に供給されたものであり、使用石材の産地付近に営まれた製作遺跡や供給の中継地となった掘立集落と県内の集落遺跡を結んだ交流や交易の証しでもある。よって、独鉱石資料は他の出土資料などとともに、当該期の地域間交流や交易を考える上でも重要な資料の一つであり、改めて独鉱石資料に潜在する資料的価値に注目する必要があると思われる。

千葉県内から出土する変質閃緑斑岩製品の使用石材は、新潟県村上市(旧・朝日村)奥三面遺跡群の発掘報告書で輝緑岩とされているものと極めて類似する石材である(柴田 2009)という指摘がある。奥三面遺跡群元屋敷遺跡は石器製作遺跡であり、様々な石器とともに独鉱石の光成品と未成品が多数出土している(瀧澤 2002)。

第2表 千葉県内出土独鉱石の岩石種別分類表

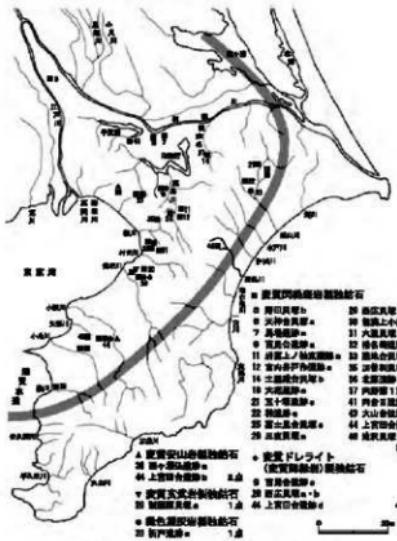
遺跡番号	遺跡名	遺跡所在地	遺物記号	比重	岩石種	備考
3	野田貝塚(第3次)	野田市清水木戸原	b	2.73	更賀四段岩	
6	天神台貝塚	印西市竹袋(日・印西市印西町竹袋字天神台)	a	2.51	更賀四段岩	
7	馬鹿谷川(第5地点)	印西市小平山(日・印西市印西町字馬鹿谷)	a	2.83	更賀四段岩	
9	吉見台遺跡	佐倉市吉見字下	a	2.81	更賀四段岩	
11	宿室上ノ地裏遺跡	佐倉市宿室字上ノ地	a	2.82	更賀四段岩	
12	古内井戸作遺跡	佐倉市古内井戸作	a	2.59	更賀四段岩	
14	土居台貝塚	成田市土居台(日・成田市土居字設台)	b	2.76	更賀四段岩	
16	大堀遺跡	印旛郡大原木水塙(日・八日市堀端大塙字水塙台)	a	2.74	更賀四段岩	
21	五十子遺跡	印旛郡五十子(日・三浦市五十子)	a	2.83	更賀四段岩	
22	林遺跡	(印旛郡五十子林木本)	a	2.62	更賀四段岩	
25	富士見台貝塚	富津市富士見台(日)	a	2.79	更賀四段岩	
26	三重貝塚	富津市三重(日)	a	2.66	更賀四段岩	
28	西広目貝塚	市原市西広目(日・市原市西広字上ノ原)	d	2.42	更賀四段岩	
30	船溝上ノ小貝塚	市原市船溝上ノ小貝塚	a	2.67	更賀四段岩	
31	六浦貝塚	千葉市六浦区六浦中央(日・千葉市小金沢町字六浦)	a	—	更賀四段岩	
32	猪名瀬遺跡	千葉市若狭(日・印旛郡猪名瀬町西原)	a	2.76	更賀四段岩	
33	地台貝塚	千葉市若狭(日・千葉市平山町字向)	a	2.53	更賀四段岩	
35	加曾利貝塚	千葉市若狭(日・千葉市若狭区加曾利木斯)	b	2.80	更賀四段岩	
36	北原遺跡	千葉市若狭(日・千葉市平山町字北原)	a	2.67	更賀四段岩	
37	内野第1遺跡	千葉市花見川区内野谷(日・千葉市宇都宮町字内野)	d	2.62	更賀四段岩	
37	内野第2遺跡	千葉市花見川区内野谷(日・千葉市宇都宮町字内野)	e	2.44	更賀四段岩	
41	向町II遺跡	白井市平井向町(日・印旛郡白井町字向町)	a	2.57	更賀四段岩	
43	大山田遺跡	木更津市大山田(日)	a	2.80	更賀四段岩	
44	上宮田台遺跡	袖ヶ浦市上宮田字上羽根	a	2.79	更賀四段岩	
44	上宮田台遺跡	袖ヶ浦市上宮田字上羽根	c	2.61	更賀四段岩	
46	淀堤貝塚	夷隅郡淀堤(日・八街市淀堤)	a	2.84	更賀四段岩	
2	三輪野山貝塚	旭市三輪野山(日・八街市)	b	—	鶴巣岩	
13	八代玉作遺跡	成田市玉作(日・成田市八代字花内)	a	3.02	鶴巣岩	
27	山野貝塚	袖ヶ浦市山野(日)	a	3.04	鶴巣岩	
33	荒地台貝塚	千葉市若狭(日・千葉市草山町字向)	a	3.01	鶴巣岩	
37	内野第1遺跡	千葉市花見川区内野谷(日・千葉市宇都宮町字内野)	b	3.02	鶴巣岩	
40	不明	市川市内	a	3.00	鶴巣岩	
45	中尻貝塚(18層段差)	船橋市中尻(日・千葉市中尻山)	a	3.06	鶴巣岩	
6	井野北削面遺跡(第5次)	佐倉市井野北削面	a	2.59	鶴巣岩	
9	吉見台遺跡	佐倉市吉見字下	b	2.64	鶴巣岩	
14	土居台貝塚	成田市土居台(日・成田市土居字設台)	a	2.63	鶴巣岩	
26	三重貝塚	富津市三重(日)	b	2.73	鶴巣岩	
28	西広目貝塚	市原市西広目(日・市原市西広字上ノ原)	c	2.66	鶴巣岩	
32	猪名瀬遺跡	千葉市若狭(日・印旛郡猪名瀬町字西原)	b	2.69	鶴巣岩	
1	月の花貝塚	松戸市小金井(日・松戸市八ヶヶ原・栗ケ沢)	b	—	ホルンフェルス	
3	野田貝塚(第20次)	野田市清水木戸原	a	2.65	ホルンフェルス	
5	下ヶ戸目遺跡(下ヶ戸宮前御前御所)	綾瀬市下ヶ戸字下ヶ戸	a	—	ホルンフェルス	
5	下ヶ戸目遺跡(下ヶ戸宮前御前御所)	綾瀬市下ヶ戸字下ヶ戸	b	—	ホルンフェルス	
7	高嶺遺跡(第5地点)	印旛郡小糸田(日・印旛郡印西町字高嶺)	a	2.72	ホルンフェルス	
12	内宮戸作遺跡	佐倉市内宮戸作	b	2.66	鶴巣岩	
12	内宮戸作遺跡	佐倉市内宮戸作	c	2.32	鶴巣岩	
37	内野第1遺跡	千葉市花見川区内野谷(日・千葉市宇都宮町字内野)	a	2.66	鶴巣岩	
42	ダラツ山遺跡	八千代市中野(日・八千代市大船原新田子ダラツ山)	a	2.69	鶴巣岩	
9	吉見台遺跡(ア場点)	佐倉市吉見字下	c	2.85	更賀四段岩	
28	西広目貝塚	市原市西広目(日・市原市西広字上ノ原)	a	3.01	更賀四段岩	
29	中尻貝塚	船橋市中尻(日・市原市中尻字下)	b	2.99	更賀四段岩	
30	上宮田台遺跡	袖ヶ浦市上宮田字上羽根	d	2.57	更賀四段岩	
1	月の花貝塚	松戸市小金井(日・松戸市八ヶヶ原・栗ケ沢)	a	—	安山岩	
5	下ヶ戸目遺跡(第7次)	綾瀬市下ヶ戸字下ヶ戸	c	—	安山岩	
5	下ヶ戸目遺跡(第7次)	綾瀬市下ヶ戸字下ヶ戸	d	2.85	安山岩	
10	江原山貝塚	佐倉市江原山(日)	a	—	安山岩	
2	三輪野山貝塚	印旛郡三輪野山(日・八街市)	a	—	多孔質安山岩	
7	馬鹿谷川(第5地点)	印旛郡小糸田(日・印旛郡印西町字馬鹿谷)	c	—	多孔質安山岩	
7	馬鹿谷川(第6地点)	印旛郡小糸田(日・印旛郡印西町字馬鹿谷)	d	—	多孔質安山岩	
37	内野第15遺跡	千葉市花見川区内野谷(日・千葉市宇都宮町字内野)	c	—	多孔質安山岩	
14	土居台貝塚	印旛郡土居台(日・印旛郡印西町字土居)	a	3.00	鶴巣岩	
16	湯田遺跡	綾瀬市湯田(日・印旛郡印西町字湯田)	a	2.97	鶴巣岩	
20	初切遺跡	印旛郡初切(日・印旛郡印西町字初切)	a	3.03	鶴巣岩	
38	吹ヶ谷谷口遺跡	印旛郡田邊谷口(日・印旛郡印西町字吹ヶ谷口)	a	2.84	更賀四段岩	
44	上宮田台遺跡	袖ヶ浦市上宮田(日・印旛郡印西町字上宮田)	b	2.33	更賀四段岩?	
4	内野貝塚	印旛郡内野(日・印旛郡印西町字内野)	a	2.77	鶴巣岩	
12	内宮戸作遺跡	佐倉市内宮戸作	c	2.95	鶴巣岩	
23	印西山遺跡	印旛郡印西山(日)	a	2.65	鶴巣岩	
29	中尻貝塚	船橋市中尻(日)	a	2.85	鶴巣岩	
30	月の花貝塚	印旛郡月の花(日・印旛郡印西町字月の花)	b	2.66	片持砂岩	
37	内野第15遺跡	千葉市花見川区内野谷(日・千葉市宇都宮町字内野)	f	2.70	点板状片持	
34	元山貝塚	千葉市印西(日・印旛郡印西町字印元)	a	—	不明	判定不可
15	駒越貝塚	印旛郡駒越(日)	a	—	土質品	
17	勝合台遺跡	印旛郡勝合台(日)	a	—	—	勝合台?
19	豊岡地区	印旛郡豊岡(日・印旛郡印西町豊岡)	a	—	—	豊岡大?
24	御殿山遺跡	印旛郡御殿山(日)	a	—	—	御殿山?
25	東内井戸作遺跡	印旛郡東内井(日)	b	—	—	東内井?
35	50番田貝塚	千葉市若狭(日・印旛郡猪名瀬町木斯)	a	—	—	50番田?
39	古作遺跡	印旛郡古作(日・印旛郡吉野町古作村)	a	—	—	古作不可
合計	46遺跡		79点	72点	7点	



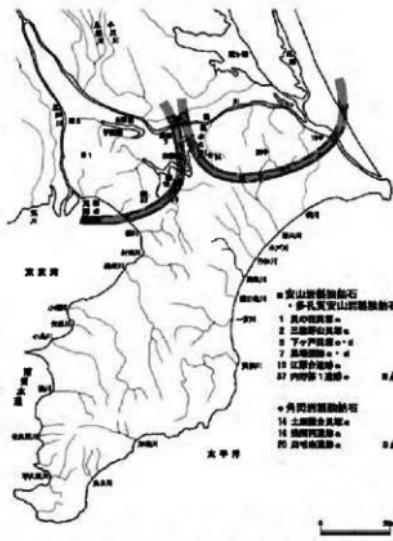
A 錫色岩製品の出土分布



C ホルンフェルス風化鉄石と真岩風化鉄石の出土分



B 宮賀内板瓦片層・宮賀ドレライト層・宮賀安山岩層・ 宮賀玄武岩層・春日原灰岩層地質学的分布



■ 安山岩質熱銹石・多孔質火山岩質熱銹石と角閃岩質熱銹石の出土分布

第13図 千葉県内出土独鉱石の岩石種別分布図

奥三面遺跡群元屋敷遺跡に見られる輝緑岩製独鉛石と県内の集落遺跡から出土する変質閃緑斑岩製独鉛石との関連性については、おそらく供給の中継地となった拠点集落や搬入ルート(供給ルート)上の遺跡からも出土する可能性が高いと考えられるため、広範囲な使用石材の研究に期待したい。

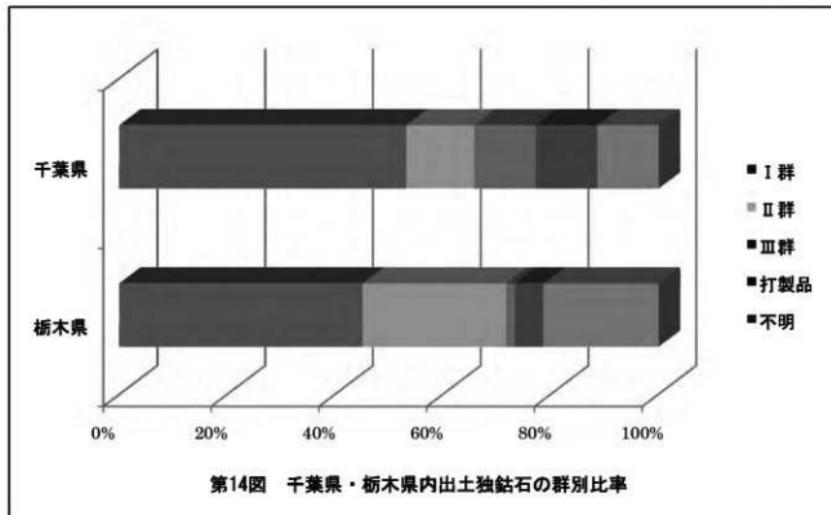
今後は、変質閃緑斑岩類製独鉛石がどこを中継地として経由し、どこを通過し千葉県内の集落遺跡にもたらされたのか、という流通ルートや交易ルートの解明が研究課題となろう。

おわりに

2008(平成20)年から本格的に再開した千葉県の独鉛石・独鉛石形土製品の研究は本年で3年目を迎え、その間、多くの研究者の方々から資料の所在情報をいただき、2010(平成20)年10月末現在、累積数は合計46遺跡79点となった。これまでの累積の状況を第1表に一覧表としてまとめ、第9図に累積図として示した。これにより、千葉県内出土の独鉛石資料が、成田市荒海貝塚の独鉛石形土製品(15-a)が出土した1960(昭和35)年や千葉市加曽利貝塚の独鉛石(35-b)が出土した1965(昭和40)年頃を境に、一気に増加する状況が理解できよう。それまでは独鉛石資料のほとんどが採集資料であったが、このころから本格的な発掘調査による出土資料が一気に増加する傾向がみられた。この様な傾向は千葉県内だけでなく全国的な傾向となり、併せて、独鉛石資料への関心も高まり、1980(昭和55)年代以降、多くの研究者による資料集成ならびに地域研究へと繋がっていったものと思われる。

本稿では、千葉県内出土の独鉛石資料を基に型式学的研究の基礎となる形態分類の研究から、全体形状をⅠ群・Ⅱ群・Ⅲ群に、中央部形状を1類～8類に、先端部形状をa類～j類に分類した。さらに、縦年の位置づけの基礎となる変遷の検討から、縦系列として岩石種群別に7分類し、横系列としてⅠ期～V期に5分類し、変遷案を第11図-(1)・(2)に示した。打製独鉛石については別に、縦系列として岩石種群別に5分類し、横系列として矢野下型と札地型に2分類し、その分類案を第12図に示した。さらに、県内出土独鉛石資料の空間的な分布ならびに括りを使用石材の岩石種別に分類・整理し、第13図-A・B・C・Dの各図に示した。

千葉県内の集落遺跡への独鉛石の搬入は、Ⅰ期の縄文時代後期前葉に、三輪山貝塚出土の緑色岩製独鉛石(2-b)を最古として開始したことが明らかとなった。言い換えれば、Ⅰ期の独鉛石の供給地域は緑色岩群の1岩石種群だけであった。Ⅱ期は後期中葉に比定され、緑色岩群に変質閃緑斑岩類群と頁岩群が加わり、供給地域の岩石種群がⅠ期の1岩石種群からⅡ期の3岩石種群に拡大する。形態分類は、Ⅰ群に加えて緑色岩群と変質閃緑斑岩類群にⅡ群が出現する。中央部形状は1類と2類で、先端部形状は緑色岩群と変質閃緑斑岩類群のa類に頁岩群のc類が加わる。Ⅲ期は後期後葉に比定され、岩石種群はⅡ期と同じく緑色岩群、変質閃緑斑岩類群、頁岩群の3岩石種群である。形態分類は中央部形状が1類・2類・4類であるが、先端部形状がa類とb類という共通性がある。このように、Ⅲ期に入ると変質閃緑斑岩類群にⅡ群とした上下非対称形のものがみられ、Ⅰ群とⅡ群の縦断面形や横断面形に次のⅣ期に盛行する扁平化の兆しがうかがえる。Ⅳ期は晚期前葉から中葉に比定され、Ⅰ群、Ⅱ群、Ⅲ群の各群が揃うほか、岩石種群も安山岩群やホルンフェルス群などが加わり、形態ならびに岩石種とも最もバラエティに富む。言い換えれば、供給地域がⅡ期・Ⅲ期の3岩石種群からⅣ期の4岩石種群に、さらに拡大したと言えよう。また、Ⅳ期に最も盛行したⅡ群は、Ⅱ期に出現したⅡ群の系統を引き継ぐものであるが、次のV期には全くみられない。V期になると、全体形状が三日月形や三日月状に反るⅢ群が出現し、Ⅳ期のⅢ群の系統はV期に引き継がれる。V期は晚期後葉から弥生時代中期に比定され、独鉛石と独鉛石形土製品の全てが三日月状に反るⅢ群で、先端部形状がa類とj類という形態的特徴である。使用石材の岩石種群が変質閃緑斑岩類群(グリーンタフ変質地帯の岩石も含む)と角閃岩群の2岩石種群に絞られる使用石材の選択性が強くみられる



という特徴と、新たに土製品の出現が特徴である。緑色凝灰岩製独鉱石23-aと角閃岩製独鉱石16-a、20-a、それから岩部地区出土の19-aなど4点は、栗山川を南限とする県北東部地域の集落遺跡から出土しており、出土分布に強い偏在性がみられる。言い換えれば、IV期に4岩石種群に拡大した供給地域が、V期に2岩石種群の供給地域に収束し、県北東部地域の集落遺跡内に変質閃緑斑岩類群(グリーンタフ変質地帯の岩石も含む)地帯の製作遺跡で完成品にされた緑色凝灰岩製独鉱石が供給されるとともに、茨城県北部地域を北から南へ流れ、久慈川と合流し太平洋へ注ぐ里川流域の製作遺跡で完成品にされた角閃岩製独鉱石が、古鬼怒湾の水系を経由し、県北東部地域の集落遺跡に供給されたものと考えられる。

栃木県内出土の独鉱石資料を集め・分類した平山の研究で、栃木県内出土資料に上下非対称形のII群としたもの(平山のII群:左右の形状が異なるもの)が栃木県の特徴であるという分類の結果が出ている(平山 1998)。平山がII群とした上下非対称形の独鉱石は、近年、千葉県内の集落遺跡からも出土しており(小澤 2009、2010)、本稿で千葉県内出土の独鉱石資料の形態分類を行いその結果が出たので、全国で最も多く出土し形態分類作業が積極的に行われている栃木県地域と千葉県地域を比較し、千葉県地域の特徴や特色を明らかにしたいと考え、先ず千葉県と栃木県の出土独鉱石に占める群別の割合をそれぞれ出した。

千葉県内出土資料79点の分類結果は、I群42点(53.2%)、II群10点(12.6%)、III群9点(11.4%)、打製品9点(11.4%)、不明9点(11.4%)である。栃木県内資料は、1998(平成10)年の平山による集成・分類以来、寺野東遺跡V(初山他 1997)、寺野東遺跡IV(江原他 1998)、藤岡神社遺跡(手塚 1997、2001)、戸木内遺跡(内山 1997)、御靈前遺跡I(進藤他 2000)、御靈前遺跡II(後藤 2001)、北の前遺跡(今平 2001)、八剣遺跡(橋本他 2001)、鳴井上遺跡(芹澤・大槻 2003)、磯間遺跡(津野・塚本 2005)など各遺跡の出土資料が累積しているため、それ等を加えて分類することとした。その結果、栃木県内出土資料の累積数は、173点(15)であった。分類結果は、I群78点(45.1%)、II群47点(27.2%)、III群3点(1.7%)、打製品9点(5.2%)、不明36点(20.8%)である。この

分類結果を第14図に棒グラフで示した。このグラフから、千葉県内出土資料はI群が約5割で残りの約5割をII群、III群、打製品、不明ではほぼ均等に分けるという結果であった。栃木県内出土資料は、I群が約4割、II群が約3割で残りの約3割をIII群、打製品、不明で分けるという結果であった。I群の出土比率は千葉県と栃木県で大差が無かったが、II群の出土比率は栃木県が千葉県より2倍強も高く、III群の出土比率は千葉県が栃木県より約7倍も高いという結果であった。本稿では特に、このII群とIII群の出土比率の差の背景について考えるために、千葉県内出土独鉛石の形態分類別分布を、A I群の出土分布、B II群の出土分布、C III群の出土分布、D打製独鉛石（矢野下型、札地型）の出土分布に分類・整理し、第15図-A・B・C・Dの各図を作成した。

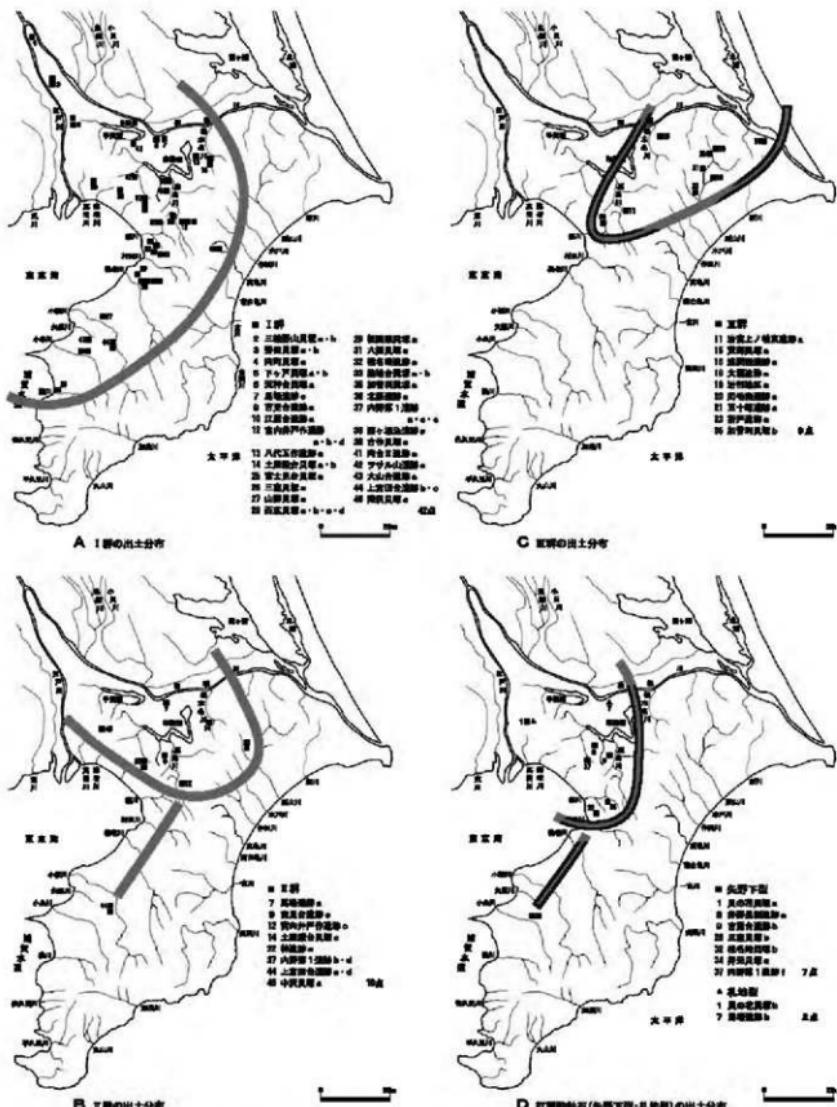
A図に示したI群の出土分布は、県北東部地域を除いた県北西部地域の野田市内町貝塚から太平洋に面した東部地域、さらに東京湾に面した県南部の富津市富士見台貝塚までの広い地域であった。B図に示したII群の出土分布は、袖ヶ浦市上官田台遺跡の2点が県南部であるが、その分布の中心は印旛沼を囲むように県北部地域に偏在する傾向がみられた。C図に示したIII群の出土分布は、栗山川流域を中心とした県北東部地域に強い偏在性がみられた。D図に示した打製独鉛石の出土分布は、東京湾東岸地域を中心に偏在する傾向がみられた。これ等の出土分布から、県内の集落遺跡はI群を出土する広範囲な分布地域と、II群、III群、打製独鉛石など分布が偏在する地域に分けることが可能である。III群が出土する県北東部地域は、今のところII群に林遺跡出土の22-aが1点あるのみで、それ以外の遺跡ではI群、II群、打製独鉛石の出土はみられない。

この様な形態差による出土分布の偏在性は、第13図に示した岩石種別の出土分布にもみられ、独鉛石の稀少性や形態の特殊性から考えて、一定地域の集落遺跡内に使用石材に対する強い選択性と形態差に対する強い伝統性が存在していたためと考えられる。また、県内出土の独鉛石に見られる形態差や使用石材が異なることによる出土分布の偏在性は、単に搬入経路（供給経路）の違いという交易ルート上の問題だけではなく、製作遺跡で製作に従事した人々や運搬に係わった人々、県内の集落遺跡との間に介在したであろう中繼地の人々、それから集落遺跡内で使用した人々など多くの人々が介在していたと考えられ、これらの地域の人々の交流によって発生する婚姻という強い結びつきによって形成された血縁関係を基盤とした通婚圏とも深く関わりがあったものと考えられる。

この通婚圏については、縄文時代後期後半から晩期にかけて関東地方の渡良瀬川中流域を中心に、甲・信方にかけての地域で発達する土製の滑車形耳飾りの出土分布から通婚圏を設定する上野修一の研究があり、寺野東遺跡出土の滑車形耳飾りと同一型式の出土分布に通婚圏を設定している（上野 1999）。県内出土独鉛石資料の分類で、II群とした上下非対称形の独鉛石のなかで、II群4-d類やII群5-d類としたもののうち大型のものは、群馬県北部地域から栃木県南部地域を中心に茨城県西部地域や千葉県北西部地域に出土分布がみられ、上野が土製滑車形耳飾りの出土分布に設定した通婚圏とおおよそ重なっており、独鉛石にも土製滑車形耳飾りと共に通する同じような祭祀に関わる行為が存在した可能性が高いと考えられる。

独鉛石の形態差にみられる出土分布の偏在性やその通婚圏の研究については、検討範囲をもう少し広げる必要があると考えており、今後は周辺地域の調査・研究が不可欠と思われる。

被熱痕が認められた独鉛石は、(1)で内町貝塚出土の磨製独鉛石(4-a)など9点に、被熱による赤化が認められたことを報告し、独鉛石を用いた祭祀行為に火の使用があった、あるいは被熱を伴う行為や状況があった可能性を指摘した（小澤 2009）。(2)では、その後の調査により16点となったことを指摘した（小澤 2010）が、今回、新たに馬場遺跡出土の磨製独鉛石2点(7-c・d)と土屋殿台貝塚出土の転用例1点(14-c)、大堀遺跡出土の磨製独鉛石1点(18-a)、内野第1遺跡出土の磨製独鉛石2点(37-d・e)の計6点に被熱痕を確認したので合計22点と



第15図 千葉県内出土独鉱石の形態分類別分布図

第3表 千葉県の独鉱石・独鉱土石製品一覧表(小澤 2009、2010に加筆・訂正)

登録番号	道府県名	地名	里 畜 所在地	高さ m	底面幅 m	底面長 m	底面積 m ²	底面形状 T × L × W	底面 E	底面分類	底面種	特記事項	先端部の剥離部、 底面の有無等	出土状況等	引用・参考文献等
1	貢献者登記簿	a	1 東京	10/10	13.87	8.41×3.00	6.41×1.79	4.40×2.58	362.4	矢野下型	安山岩	打削・荒削	剥離底	A-E II 遺物包含層	(八幡社 1975)
#	#	b	2 #	10/10	12.04	5.20×2.26	4.27×2.14	2.70×2.50	171.0	札幌地	カルン・フルズ	打削・荒削・被削底	BP-a-4 遺物包含層	#	
2	三郷野山真庭	a	3 茨城	10/10	13.92	7.17×3.33	5.89×3.37	4.50×3.50	258.8	E-2-g	多孔質安山岩	磨削	底面無	中央區遺物包含層	(小澤・小川・宮川 2006)(小澤 2009)
#	#	b	4 #	5/10	(7.12)	4.73×4.00	3.88×3.38	—	(172.0)	I-1-e	褐色砂岩	磨削	剥離底面有	東延地M-083-17号住跡遺土中	#
3	野田真庭	a	5 茨城	7/10	(16.94)	8.28×3.00	5.10×2.91	3.50	(218.5)	I-2-g	カルン・フルズ	磨削・被削底有	四端部剥離底面有	1号丘墓	(大庭・大曾・小川 2005)(小澤 2010)
#	#	b	5 #	3/10	(4.10)	8.11×4.12	5.85×3.12	—	(122.5)	I-4-g	東延地真庭	磨削	—	O-5グリット遺物包含層	(大庭・小川 2007)(永裕 2010)(小澤 2010)
4	内町真庭	a	7 岡山	10/10	11.44	6.14×3.36	5.78×4.37	1.60×1.50	880.0	I-4-g	西側面	磨削・被削底有	剥離底面有	H-1シンド遺物包含層	(木輪、(石井 1982、1985)(小澤 1986)(澤田 2000))
5	下千戸真庭(下千戸真庭)	a	8 岡山	8/10	(19.43)	9.25×3.07	7.86×3.83	3.03	(280.0)	I-3-f	カルン・フルズ	磨削・大型	傾斜断面	004号住跡遺土中	(澤村他 1994)(石田 2000)(伊藤子市 2005)(小澤 2009、2010)
#	#	b	9 #	8/10	(11.82)	6.57×3.26	4.71×2.72	3.00×3.00	(295.5)	I-2-g	カルン・フルズ	磨削品・舟形へ延用	剥離底面有	001号住跡遺土中	#
#	#	c	10 #	8/10	(5.84)	—	—	—	(21.1)	—	安山岩	磨削・被削底有	—	O-6グリット遺物包含層	(澤村他 1994)(石田 2000)(伊藤子市 2005)(小澤 2009、2010)
#	#	d	11 #	1/10	(8.48)	—	—	—	(34.5)	—	安山岩	磨削・被削底有	—	傾斜断面遺土中	#
6	夫神合真庭	a	12 岐阜	8/10	(3.47)	5.84×2.90	4.85×2.80	—	(192.0)	I-2-e	東延地真庭	磨削・被削底有	剥離底	M-1点2層	(金子 1981)(小澤 2010)
7	萬石遺跡(第5地点)	a	13 岐阜	10/10	30.53	10.80×4.85	8.39×3.23	4.50×4.10	1,470.7	I-2-d	東延地萬石	磨削・大型	傾斜断面	14号住跡底面以上	豊岡辨定所、(和田 2007)(夏川 2008)(小澤 2010)
#	#	b	14 #	8/10	(11.26)	5.63×3.26	4.33×2.40	3.20×2.70	(201.0)	札幌地	カルン・フルズ	打削・荒削・一部削	剥離底面有	0号住跡遺土中	#
#	#	c	15 #	8/10	(7.20)	8.80×3.25	6.90×3.10	—	(24.0)	I-2-g	多孔質安山岩	磨削・被削底有	W-17厚底	推進遺土中	(澤田 2009)(和田 2007)(春田 2008)
#	#	d	16 #	3/10	(3.95)	—	—	—	185.8	—	多孔質安山岩	磨削・被削底有	W-17厚底	B-6-10グリット遺物包含層	#
8	井谷多利真庭(井谷多利)	a	17 佐倉	9/10	13.48	8.80×2.65	5.50×2.93	3.20	321.0	矢野下型	砂岩	打削・荒削	剥離底	井谷多利遺物コレクション	(小倉 2004)
#	#	b	18 #	10/10	14.85	5.80×3.83	4.31×3.23	4.80×4.20	406.2	I-2-g	東延地井谷多利	磨削・大型	傾斜断面	O-1グリット2層	(近藤他 1993)
#	#	c	19 #	10/10	13.38	8.80×3.03	5.49×3.13	5.30×3.90	334.0	矢野下型	砂岩	打削・荒削・一部削	剥離底面有	O-2グリット1層	(近藤他 1993)(永崎 2010)
#	#	d	20 #	10/10	10.17	4.22×2.77	3.88×2.82	2.40	253.0	E-3-e	東延地ラバード	磨削・小型	剥離・被削底	B-6-9グリット遺物包含層	(林田 2000)
10	江原合真庭	a	21 佐倉	10/10	9.13	5.80×3.63	4.75×3.35	2.80	285.3	I-2-g	安山岩	磨削・小笠	磨削底面有	M-12点3号住跡土中	木輪、(堀野・高岡・山田 1980)
11	若狭上ノ御原遺跡	a	22 佐倉	10/10	15.77	8.51×3.96	5.85×3.59	2.56×2.87	389.5	E-2-g	東延地若狭上	磨削	磨削底面	M-12点3号住跡土中	(小倉 2008)
12	宮内芦合真庭	a	23 佐倉	10/10	15.83	8.14×3.65	5.12×3.98	3.20	355.5	I-2-g	東延地宮内芦	磨削	磨削底面	M-12点3号住跡土中	(小倉 2003、2006)
#	#	b	24 #	4/10	(10.38)	—	—	—	(85.5)	I-1-e	真庭	磨削	—	地区M-48-49グリット遺物包含層	#
#	#	c	25 #	10/10	9.68	8.84×2.41	4.71×2.40	3.20×3.10	333.0	—	磨削石岩	磨削石・荒削	M-12点3号住跡土中	(小倉 2003、2010)	
#	#	d	26 #	3/10	(16.67)	4.21×4.1	—	—	32.0	I-1-e	真庭	磨削	—	地区M-48-49グリット遺物包含層	#
13	八代玉作真庭	a	27 成田	10/10	13.69	8.02×3.00	4.87×3.23	2.10	488.5	I-1-e	褐色岩	研磨・直線底面有	剥離底面有	D-0号穴住跡3号土中	木輪、(天野他 1981)(森山 2000)
14	土屋合真庭	a	28 成田	8/10	12.22	4.78×4.47	3.53×3.55	4.30×3.90	311.8	I-2-g	真庭岩	磨削	真庭岩剥離底面有	K-延地合真庭	木輪、(延地他 1984)(内内 1987)
#	#	b	29 #	5/10	(7.74)	5.28×3.47	4.29×3.20	—	(183.0)	—	研磨・直線底面有	光端底面有	I-15-1-2グリット遺物包含層	(延地他 1984)(小澤 1989、2010)(内内 1997)(永島 2010)	
#	#	c	30 #	10/10	9.25	4.85×3.40	3.87×3.24	2.60×2.10	140.1	I-1-e	皆川	研磨品・被削底有	光端底面有	内内A-1直線底面有	(木輪、(延地他 1984)(小澤 2008)(内内 1997))
15	荒鳥合真庭	a	31 成田	8/10	(4.72)	3.71×3.40	2.85×3.40	—	(27.0)	E-0-j	土壌層	—	A地点D-レコード4區出土	(西野 1988)(西野 1976)(波根・春成 2000)(小澤 2008)	
16	施間合真庭	a	32 東庄	7/10	(12.85)	4.47×2.53	2.94×2.39	3.80×3.40	(166.7)	E-0-j	舟形岩	磨削	磨削底面有	地区内西壁より出土 木 保持氏撰見	(東庄町 1982)(東庄 2008)
17	黒島合真庭	a	33 仙子	10/10	(18.00)	—	—	—	—	—	—	—	—	古文式舟形	(伊藤・金子 1989)(仙子他 1981)
18	大瀬遺跡	a	34 仙子	10/10	17.08	4.46×3.69	3.81×2.82	4.10×2.75	255.8	E-2-h	東延地大瀬	磨削	磨削底面有	櫻小窓底面有	(木輪 1986)(仙子 1986b)
19	御宿地区	a	35 仙子	10/10	(76.96)	—	—	—	—	E-0-j	磨削	磨削	磨削底面有	櫻小窓底面有	(木輪 1986)(仙子 1986b)
20	周毛遺跡	a	36 仙子	10/10	18.98	3.85×3.72	3.08×3.08	3.16	237.2	E-4-c	舟形岩	磨削	磨削底面有・剥離底	櫻より上石 石被瓦剥離底見	(黒瀬 1974)(小澤 2008)
21	五十嵐遺跡	a	37 古河	3/10	(8.65)	—	—	—	(85.0)	E-1-j	東延地四面削	磨削	研磨底	—	(小澤 1989)
22	林遺跡	a	38 多古町	10/10	14.87	5.54×3.03	4.35×3.72	2.80×2.20	357.8	E-2-a	東延地四面削	磨削	研磨底	—	(小澤 1989b)
23	折戸遺跡	a	39 芝山町	10/10	18.88	4.83×3.09	3.80×2.77	5.60×3.30	298.8	E-7-i	褐色底灰岩	磨削	先端部剥離底	遺物包含層より板瓦 斧式見	(小澤 2008)

14	石神貝塚	#	40	茨城市船	(鉢片)	—	—	—	—	—	—	—	—	不明	(長良町 1972)	
25	喜士瓦台遺跡	#	41	鹿嶺市	10/10	13.32	8.25×3.80	5.13×2.97	2.52×2.36	378.5	I-2-d	皮質凹面現存	磨製	磨光成・削面成	昭和42年茨城県立博物館遺物名古屋	(柳山・金子 1972)(小野 2010)
#	#	b	42	鹿嶺市	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(八幡・中津 1928)
26	三連貝塚	#	43	鹿嶺市	10/10	15.37	5.82×3.84	5.00×3.25	3.00	381.8	I-2-e	皮質凹面現存	磨製・壘状に堆積有 夷先焼附剥離成	SH-50Nは施築中地點	本郷、(吉野 2000)	
#	#	b	44	#	10/10	13.34	9.22×2.49	4.83×2.03	4.80	216.8	矢頭下型	刮削・茎平・自然剥離	削成・底平・剥離底等	SH-02Bは施土中	#	
27	山野貝塚	#	45	地ヶ崎町	10/10	14.75	4.12×3.19	3.19×2.73	3.00	293.4	I-1-e	絶色成	磨製・壘状に堆積有 夷先焼附剥離成	昭和48年茨城県立博物館D7グリッド第1層	本郷、(野村・千葉・西山 1973)	
28	西丘貝塚	#	46	市原市	1/10	7.25	—	—	—	144.0	I-2-d	皮質凹面現存	磨製・被磨成有	—	UNSHI1機械運搬台荷台点	(境口他 1977)
#	#	b	47	#	3/10	(7.16)	4.48×3.89	5.27×3.51	3.00	(168.3)	I-2-e	皮質凹面現存	磨製	—	DS-91Eは施下	#
#	#	c	48	#	10/10	14.25	6.82×3.50	5.34×2.18	2.70-2.80	477.8	I-4-g	砂粒	磨製・被磨成有 夷先焼・削面成	夷先焼・削面成	D4-42は施土台含層	(境口他 1977)(佐藤 2010)(小野 2010)
#	#	d	49	#	5/10	(10.05)	7.85×4.76	5.40×3.85	—	(305.6)	I-3-e	皮質凹面現存	磨製・被磨成有 夷先焼刃形刃状	CD-91は施土	(境口他 1977)	
29	佐渡岡遺跡	#	50	市原市	10/10	18.05	5.57×3.29	4.86×2.82	2.10-2.90	416.5	I-1-e	夷先式武具	磨製	傷い透視成	D3-46グリッド遺物包含層	本郷、(恩原 1998)
30	船塚上小貝塚	#	51	市原市	1/10	(2.86)	(4.54×—)	—	—	(31.0)	皮質凹面現存	磨製・被磨成有	—	12号施土は施土中	(恩原 1998)	
#	#	b	52	#	3/10	(7.81)	5.14×—	4.18×—	—	(95.5)	—	片狀砂粒	磨製・被磨成有 夷先焼成	傷い削面成	TC-44グリッド2層	#
31	六道貝塚	#	53	千葉市	5/10	(7.06)	8.22×4.55	5.03×3.40	—	(164.1)	I-1-g	夷先焼凹面現存	磨製	傷い透視成	施土中から出土か	(三毛 1962)(伊藤他 1966)(東京国立博物館 1979)(小野 2008)
32	佐名崎遺跡	#	54	千葉市	10/10	13.34	8.88×2.90	4.13×2.46	1.75	245.5	I-2-e	夷先焼凹面現存	磨製	夷先焼附剥離成	夷先焼成	本郷、(恩原・上村 1978)
#	#	b	55	#	7/10	(11.18)	6.47×3.35	4.46×2.70	3.20	(335.0)	夷先下型	砂粒	打削・茎平・被磨成有 夷先焼成	夷先焼成	#	
33	笠合台遺跡	#	56	千葉市	10/10	13.08	5.72×3.77	4.29×2.82	2.10-3.00	274.0	I-4-e	夷先焼凹面現存	磨製	—	9号施土は施土中	本郷、(恩原・喜水・芦戸・杉山・瀬戸 1970)(恩原 2000)
#	#	b	57	#	10/10	14.82	4.67×3.70	3.29×2.72	3.10-3.00	305.8	I-4-e	絶色成	磨製	—	DS-48グリッド遺物包含層	#
34	仲元貝塚	#	58	千葉市	10/10	18.53	5.82×2.51	4.08×2.51	4.85-4.70	338.5	I-2-g	夷先下型	不明	打削・茎平・被磨成有 夷先焼成	—	(University of Tokyo 1884)(田中・林 1887)(小野 2009)
35	加賀利貝塚	#	59	千葉市	10/10	(18.00)	8.10×—	(4.70×—)	[2.08]	—	I-2-d	—	磨製	夷先焼刃形刃状	江曾利臼式土器が出土する地点	(甲野 1941)
#	#	b	60	#	10/10	17.32	8.28×3.87	4.80×2.92	4.10-3.27	396.2	I-2-h	夷先焼凹面現存	磨製	夷先焼刃形刃状	江曾利臼式土器ノミ・瓦類遺物包含層	(境口他 1968)
36	北原遺跡	#	61	千葉市	10/10	18.71	6.82×4.43	4.01×3.28	3.90	412.8	I-2-b	夷先焼凹面現存	磨製・削面成	研磨成・透視成	操作中に土 石器複数氏見見	(小野 1985e)
37	内野第1遺跡	#	62	千葉市	7/10	(12.70)	4.10×2.85	3.22×2.85	2.00	240.0	I-4-e	絶色成	磨製	研磨成	IC-10グリッド遺物包含層	(吉谷・田中他 2001)(小野 2009)
#	#	b	63	#	10/10	12.30	9.18×3.32	4.14×2.88	3.60-3.00	347.2	I-1-e	絶色成	磨製	夷先焼成	IC-8aグリットヘ-2号施土は施土中	#
#	#	c	64	#	10/10	18.25	5.58×4.87	4.34×3.88	5.20-4.70	304.0	I-2-g	多孔質灰岩成	磨製・被磨成・底成有 夷先焼附剥離成	IC-11dグリッド3号施土は施物包含層	#	
#	#	d	65	#	8/10	9.24	4.85×4.43	4.23×3.29	2.80-3.20	261.1	I-2-e	夷先焼凹面現存	磨製・被磨成有 夷先焼透視成	IC-9aグリッド5号施土は施物包含層	#	
#	#	e	66	#	7/10	(7.47)	5.07×4.20	3.87×3.77	3.20-3.20	(197.2)	I-2-g	夷先焼凹面現存	磨製・被磨成有 夷先焼透視成	IC-8-15eグリッド遺物包含層	(小野 2008)	
#	#	f	67	#	10/10	9.35	4.81×3.65	3.34×2.88	3.20-3.00	185.5	久須下型	打削・茎平・夷先焼成	夷先焼成・1号施土は施土中	田中 2005 (小野 2009)		
38	西ヶ原久須跡	#	68	郡山市	5/10	(11.58)	4.82×4.13	4.35×3.75	3.00-2.80	(321.1)	I-1-e	夷先焼凹面現存	破損品・底へ削成	IC-8bグリッド遺物包含層	佐理調查令、(中村 1985-1986)(小野 2010)	
39	古作貝塚	#	69	郡山市	10/10	—	—	—	—	I-2-b	—	磨製	夷先焼成	—	佐理資料(柴田太夫の資料)記載	(佐理 2000-2004)
40	不明	#	70	市川市内か	10/10	18.22	4.65×3.41	3.47×2.85	4.10-3.80	299.8	II-2-i	森林岩	夷先焼附剥離或底成	佐理資料(中島裕介コレクション)	本郷、(佐理 1980) (小野 1985a) (恩原 1988) (小野 2008)	
41	舟合Ⅱ遺跡	#	71	白井町	10/10	18.53	6.24×4.82	5.29×4.11	2.85	521.9	I-4-e	夷先焼凹面現存	夷先焼・底成有 夷先焼附剥離成	2B32aグリッド4号施土は施物包含層	(林田・高橋・木戸 1991)(小野 2010)	
42	アツル山遺跡	#	72	八千代市	10/10	19.35	5.84×3.70	3.27×2.88	3.00	394.3	I-1-e	箕山	磨製	夷先焼附剥離成	IC-12-74グリッド遺物包含層	(恩原 1988)(小野 2010)
43	大山遺跡	#	73	木更津市	10/10	14.33	8.82×4.80	5.18×3.72	3.70-3.00	484.0	I-4-e	夷先焼凹面現存	夷先焼成	夷先焼附剥離成	光江・上原・林 2004 (小野 2010)	
44	上當台遺跡	#	74	鴨川市	9/10	10.32	5.27×3.86	4.76×3.22	2.05	344.5	I-4-e	夷先焼凹面現存	夷先焼底へ削成	A-8-1グリッド遺物包含層	(安井 2007, 2010)	
#	#	b	75	#	8/10	(9.02)	(3.76)×3.81	3.88×3.87	2.08	(200.6)	I-2-g	夷先焼凹面現存	夷先焼成有	A-8-0グリッド遺物包含層	#	
#	#	c	76	#	4/10	(9.26)	(—)×4.15	(—)×3.28	2.10	(199.7)	I-4-e	夷先焼凹面現存	夷先焼成有	A-9-15グリッド遺物包含層	#	
#	#	d	77	#	10/10	12.28	5.41×3.73	4.87×3.30	3.20	403.5	II-1-d	夷先焼下型	夷先焼底へ削成	B-7-84グリッド遺物包含層	#	
45	中央黄貝塚(10号調査)	#	78	鎌谷市	10/10	8.84	4.06×3.22	3.85×3.28	3.00-1.85	144.5	I-2-e	夷先焼成	駆逐品・被磨成有 夷先焼成	BSグリッド遺物包含層	本郷、(大澤田 1984) (大野 2010)	
46	桃沢貝塚	#	79	鎌谷市	10/10	12.48	4.91×3.41	4.80×3.30	3.50	323.0	I-2-e	夷先焼凹面現存	夷先焼附剥離成	作業中に出土	本郷	

註: 第3表の計測復データ等は、小野が行った調査による。()は計測位置内に欠損があった場合で、—は計測や取扱が不可能だった場合である。[]は1985年の調査(小野 1985a)によるものである。なお、岩石理は無田 雅氏による判定である。

なった。累積数79点中の所在が判明した72点に占める割合は、約30.5%で3割を超えた。のことから、独鉛石を用いた祭祀行為に火の使用があった、あるいは被熱を伴う行為や状況があった可能性が高いと考えられる。今後も独鉛石の被熱痕の有無については、注目して行く必要があると思われる。

独鉛石を磨製石斧へ転用しているものがある。独鉛石を磨製石斧へ転用したものとしては、既に(1)で佐倉市宮内井戸作遺跡出土例(12-c)と船橋市西ヶ堀込遺跡出土例(38-a)の2例を指摘した(小澤 2009)。さらに、(2)で我孫子市下ヶ戸貝塚出土の1例(5-b)と袖ヶ浦市上宮田台遺跡出土の2例(44-a・d)を指摘し(小澤 2010)、その後の調査で確認した成田市土屋殿貝塚出土例(14-c)と鎌ヶ谷市中沢貝塚出土例(45-a)の2例を加えると、転用例は合計6遺跡7例となった。まだ全資料数の1割弱だが、徐々に1割に近づいている。

なお、第11図に示した変遷案と第12図に示した分類案は、千葉県内で出土した合計46遺跡79点の累積による約80点の形態分類に基づくものである。当然のことであるが、今後、新たな資料の累積や周辺地域の研究により、空白部分が埋まる可能性がある。

今後は、独鉛石以外の石器や石製品でも積極的に調査・研究を行う必要があると思われる。なかでも特に、縄文時代後・晚期を中心に出土時期をほぼ同じくする石冠や石棒、石剣、石刀などの研究は必要不可欠と考える。また、石器や石製品の型式学的研究や縦年の研究にあたっては、先ずそれらの使用石材の岩石種を正確に判定し、製作遺跡を包括した岩石種群という単位で系列化する。次に形態的特徴を分類・整理し、さらに型式学的研究により個々の形態の消長を明らかにすることにより、その道具の出現から形態変化ならびに終焉までの全体の変遷を明らかにすることが可能と思われる。よって今後は、石器や石製品の使用石材の岩石種を正確に判定することが重要かつ基本的な調査項目となろう。石器や石製品の使用石材の岩石種判定の結果は、単に空間的系統論といった分布論だけでなく、型式学的研究の基礎となる形態分類と併せて岩石種群という単位で系列化し分類・整理することにより、地域的な時間的・空間的課題の検討や研究が可能となると考える。そして、地域的な特徴ならびに特色を明確にし、その地域の固有性ならびに他地域との共通性を地域間で比較研究することにより、少しずつではあるがその背後に存在した確かな人間活動の実態ならびにその文化的・社会的背景の全容が解明されていくものと考える。

これらの研究の続きは、次号の『貝塚博物館紀要』第39号に掲載する予定である。

最後に、本稿をまとめるにあたり多くの助言や資料の実見・掲載等で次の方々および機関にお世話になった(敬称略ならびに五十音順)。

新井雅幸、井口 崇、井口寛之、石橋博之、糸原 清、稻葉佳代子、大塚俊雄、上野修一、江原 英、岡村眞文、岡村道雄、岡本孝之、小川勝和、小倉和重、小栗信一郎、忍澤成視、尾島忠信、折原 繁、甲斐博幸、喜多裕明、倉田恵津子、黒沢哲郎、栗原薰子、後藤信祐、笠本良雄、柴田 徹、榎山林雄、諫訪 元、清藤一順、瀬尾貴行、染谷勝彦、高花 宏行、武川夏樹、榎谷健治、富樫秀之、戸村正己、中村宣弘、永嶋正春、永塚俊司、那須正義、西野雅人、西山太郎、野口和己子、野田豊文、能城秀喜、萩原清史、初山孝行、濱名徳永、藤村東男、古谷 肇、星野保則、松田富美子、持田大輔、森嶋秀一、安井健一、山本暉久、領塚正浩。

国立歴史民俗博物館、東京国立博物館、東京大学総合研究博物館、早稲田大学會津八一記念博物館、千葉県立中央博物館、千葉県立房總のむら風土記の丘資料館、千葉県立多古高等学校、栃木県教育委員会、財団法人千葉県教育振興財团文化財センター、財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター、財団法人印旛都市文化財センター、我孫子市教育委員会、市原市教育委員会、小山市教育委員会、鎌ヶ谷市教育委員会、木更津市教育委員会、桐生市教育委員会、佐倉市教育委員会、栃木市教育委員会、成田市教育委員会、野田市教育委員会、船橋市教育

委員会、松戸市教育委員会、村上市教育委員会、八千代市教育委員会、東庄町教育委員会、市原市埋蔵文化財調査センター、鎌ヶ谷市郷土資料館、木更津市郷土博物館金のすず、(宗)芝山はにわ博物館、市立市川考古博物館、白井市郷土資料館、流山市立博物館、藤岡歴史民俗資料館、船橋市飛ノ台史料公園博物館、松戸市立博物館、八街市郷土資料館、八千代市立郷土博物館。

なお、千葉県内出土の独鉛石資料の岩石種判定は、2008(平成20)年から東海大学非常勤講師柴田 徹氏とともに実施している。また、県外資料の岩石種判定についても柴田 徹氏と共同調査ならびに研究を実施している。まだまだやらなければならないことは山積しており途半ばではあるが、今回、本紀要に玉稿を掲載させていただいた。また、現在整理調査中の下ヶ戸貝塚出土資料の掲載にあたっては、我孫子市教育委員会岡村眞文氏に特段の配慮をいただいた。同じく馬場遺跡出土資料の掲載にあたっては、財団法人印旛郡市文化財センター喜多裕明氏に特段の配慮をいただいた。同じく西ヶ堀込遺跡出土資料の掲載にあたっては、船橋市教育委員会中村宜弘氏に特段の配慮をいただいた。資料の借用にあたっては、当館長青沼道文氏および飛田正美氏にお世話になった。本稿の第8図・13図・15図ならびに写真図版の作成にあたっては、当館学芸員森本 剛氏の協力を得た。記して感謝お礼申しあげたい。

(千葉市立加曽利貝塚博物館)

註

- 「千葉県の独鉛石・独鉛石形土製品(1)」は、本文中及び脚注とも以下、(1)と表記する。
- 「千葉県の独鉛石・独鉛石形土製品(2)」は、本文中及び脚注とも以下、(2)と表記する。
- 「千葉県の独鉛石・独鉛石形土製品(3)」は、本文中及び脚注とも以下、(3)と表記する。
- (2)では、(1)発表後の調査で新たに野田市野田貝塚出土資料中に1点、富津市富士見台貝塚出土資料中に1点、白井市向台II遺跡出土資料中に1点、八千代市ツラル山遺跡出土資料中に1点、木更津市大山台遺跡出土資料中に1点、袖ヶ浦市上官田台遺跡出土資料中に4点の計9点を確認したため、(1)の第6図と第1表に加筆した。(3)では、(2)発表後の調査で新たに印西市馬場遺跡第5地点出土資料中に2点、成田市上層殿台貝塚出土資料中に1点、鎌ヶ谷市中沢貝塚出土資料中に1点、東金市松之郷から八街市瀬戸地区に位置する瀬沢貝塚出土資料中に1点の計5点を確認したため、(2)の第6図に新たに出土が判明した2遺跡を加筆し、第8図に出土地が不明の中島辨智コレクション40-aを除いた合計46遺跡の分布を示した。また、(2)の第1表に新たに確認した独鉛石資料5点の調査データを加筆し、(3)の第3表に合計79点の調査データを掲載した。

なお、栗島台貝塚から出土した17-aは、栗島台貝塚が縄文時代前期・中期の遺跡なので独鉛石は出土しないという意見があるようであるが、1973(昭和48)年と1975(昭和50)年の発掘調査により第2～3層の所謂泥炭層から第XV群土器と分類した縄文時代後期初期の称名寺式土器や第XVIII群土器と分類した堀之内式土器が出土しており(寺村他 2000)、栗島台貝塚は後期前業まで確実に続く遺跡であることが明らかとなった。本稿の変遷図に照らせば、I期～II期にかけての時期に比定される。よって、独鉛石が栗島台貝塚から出土する可能性はあると考えられるため、(1)・(2)に引き続き、本稿では『銚子市史』の記述(銚子市 1981)に沿って第1・2・3表の一覧表に含めることとした。また、出土地が不明の中島辨智コレクション40-aは、中島辨智氏の資料収集活動が市川市内に留まらず、広く関東地方や東北地方などを含む広範囲であったと考えられる(小澤 2010)。県外出土資料の可能性もあるため、第8図の出土遺跡分布図および第11図の変遷図、第13図の岩石種別分布図、第15図の形態分類別分布図には除いた。

- 1935(昭和10)年前後、旧・八日市場市大堀802番地の地元農家であった故・平山光一氏が、大堀612番地の畑を耕作中に発見したものである。その後、1971(昭和46)年に資料保管者は変わり、永い間、大堀762番地の故・那須哲治郎氏宅の神棚に大切に保管さ

れていた。

- 6 大塙遺跡出土独鉛石(18-a)の発見から報告に至るまでの経緯については、資料報告時に既に明らかにした(小澤 1985b)。しかし、1985(昭和60)年の報告の実測図は不十分で、悪い間、報告を改める機会を待っていた。今回、本稿を発表するにあたり、改めて再調査ならびに再実測を行い、報告するものである。
- 7 1959(昭和34)年に刊行された『千葉県石器時代遺跡地名表』の一覧表に、通番号:223 千葉市番号:83 遺跡名:椎名崎 地形:台地上及び斜面山林 遺跡の種類及び規模:貝塚中 編年:加曾利E式・塙之内式・加曾利B式 と挙げられており、椎名崎遺跡が所在した泉支谷と椎名支谷の間の台地には、椎名崎遺跡の東側に椎名崎貝塚が存在したことが記載されている(伊藤・金子 1959)。また、同年に刊行された『日本貝塚地名表』には、通番号:968 地方番号:561 代表名:椎名崎 異称:御代城貝塚 現所在地:千葉県(下總国)千葉市(旧椎名村)大字椎名字御代城 地形:台上・斜面 自然遺物:貝類 編年:加曾利e・塙之内・加曾利b 備考:実査と挙げられ(酒詰 1959)、酒詰が2年後に刊行した『日本縄文石器時代資料總説』の番号445椎名崎での貝類の報告(酒詰 1961)へと繋がっていったものと思われる。その記載には、「以上著者採集、同定」と記述しており、これらの記述から酒詰仲男が実際に御代城に所在した椎名崎貝塚を踏査したと思われる。以上、伊藤・金子や酒詰の報告から千葉市椎名崎町字御代城を中心とした台地上から斜面に貝塚が存在したことは明らかであろう。なお、椎名崎貝塚の所在について記載した最も古い報告は、1953(昭和28)年に刊行された『千葉市誌』に武田宗人が掲載した「千葉市附近縄文時代遺跡地名表」中に通番号:58 名称:椎名崎遺跡種別:貝塚 遺物其他:後期 と報告した記載である(武田 1953)。1976(昭和51)年に刊行された『千葉市史 史料編1原始・古代・中世』の「千葉市内縄文時代の遺跡地名表」には、No.160西原遺跡とNo.161道作貝塚(椎名崎・木戸作貝塚)と記載されている(千葉市 1976)。1983(昭和58)年に刊行された『千葉県の貝塚』には、通番号315 椎名崎貝塚が挙げられる(千葉県 1983)、1984(昭和59)年に刊行された『千葉市埋蔵文化財分布地図(改訂版)附篇』には、M-8-4 名称:椎名崎 所在:椎名崎町道作種別:地点貝塚 備考:木戸作貝塚、椎名崎貝塚とも称す と、M-8-24 名称:椎名崎 所在:椎名崎町御代城 種別:貝塚 備考:未確認 の2遺跡が挙げられている(千葉市 1984)。既に椎名崎貝塚について報告されているこれらの記載内容と椎名崎の地番剖面(千葉市史 1993)を照合してみると、1999(平成11)年に刊行された『千葉県埋蔵文化財分布地図(3)』の遺跡番号18 椎名崎遺跡は宇西原に、25椎名崎貝塚は宇御代城に、19木戸作遺跡は宇道作に所在すると記載されている(千葉県 1999)内容と符合しており、東西に伸びる台地には西側から椎名崎遺跡、椎名崎貝塚、木戸作遺跡の順に3遺跡が存在したことになろう。椎名崎遺跡の独鉛石2点が表面採集された地点は、「台地の東端に属する堅穴住居址群の周辺より」という報告書の記載(栗本・上村 1979)から、遺跡の東側に所在した椎名崎貝塚の遺跡範囲に含まれる可能性があり、椎名崎貝塚の形成時期が中期後半(加曾利E式期)→後期中葉(加曾利B式期)であった点も考慮すると、さらにその可能性は高いと思われる。
- 8 滝沢貝塚出土と考えられる晚期前葉に比定されるミミズク土偶は、1995(平成7)年頃、八街市滝台地区の地元の方が発見し、八街市郷土資料館へ寄贈した土偶の頭部片である。滝台地区で晚期前葉に比定されるミミズク土偶が出土する可能性のある遺跡は、滝沢貝塚しかない。この他、井口寛之氏所有の畠から耕作中に出土した資料の中にも晚期前葉に比定されるミミズク土偶片がみられた。
- 9 (1)では、千葉県の独鉛石・独鉛石形土製品として65点の調査データを発表した(小澤 2009)。(2)では、その後の調査で新たに9点の出土を確認し、出土地が不明の中島辨智コレクションを除いた合計43遺跡の分布を示すとともに、(1)発表後に新たに確認した独鉛石資料9点の調査データを加筆し、合計74点の調査データを発表した(小澤 2010)。(3)では、(2)発表後の調査で出土を確認した5点を加え、合計46遺跡79点の調査データを掲載する。なお、現在整理調査中の1遺跡において、独鉛石の転用品を1点確認しているので、実態は合計47遺跡80点である。全国で50点以上出土する地域を県別に挙げると、多い順に栃木県、新潟県、福島県、岩手県、茨城県、岐阜県、埼玉県、青森県、千葉県、秋田県、群馬県、長野県、山形県の順である。
- 10 1985(昭和60)年に後藤信祐が初めて「左右非対称」という用語を使いA-4型、A-5型に分類した(後藤 1985)。後藤はこの

時、遺物図版を横組みとしたため「左右非対称」という用語を使ったと思われるが、その中で示した変遷模式図は縦組みとしており「左右非対称」という用語とは一致しない。おそらく、後藤も縦組みが基本と考えていたために変遷模式図を縦組みとしたに違いない。図版の組み方は、既に縦組みにすることが提案されており(岡本 1996)、小澤も(1)で縦組みにすることを提案した(小澤 2009)。この提案に基づき、上下対称形、上下非対称形という用語を使うこととした。

- 11 平山の分類方法(平山 1998)に対し、岡本孝之は「大別としての対称形と非対称形とを重視する立場は興味深いが、この分類では栃木県の特徴のみが目立ちすぎ、他地域との平衡を欠くように思われる。」(岡本 1998)という指摘を行った。地論に根ざした研究者が、地域的な課題や問題を取り上げ研究して行く上で、平山の分類方法は重要な視点であるし、また分類方法であると思われる。このような分類方法を基本として、地域的な特徴ならびに特色を明確にし、その地域の固有性ならびに他地域との共通性を地域間で比較・検討することによって、少しずつではあるが文化的・社会的背景の全容が明らかになっていくものと思われる。
- 12 磨製、打製、土製の分類基準は、(2)の計測値の分析の項目で分類基準を挙げた(小澤 2010)。(3)は、その分類基準に基づく。
- 13 打製品については、岡本孝之が埼玉県内資料の再検討を行い、扁平タイプを矢野下型、札地型、上下非対称型の3型式に分類している(岡本 2004)。本稿ではその分類に基づき、縦断面形が扁平で、「剥離 → 刻離調節」を基本としたものを打製品とした。
- 14 岩石種名の表記は、柴田 徹氏の研究成果(柴田 2009)に基づくものである。

- 15 平山が集成に挙げた寺野東遺跡出土の13点は、「寺野東遺跡V」の環状盛土遺構出土品と重複するので、発掘調査報告書を優先した。また、資料検査の際、「寺野東遺跡出土資料で『寺野東遺跡V』の環状盛土遺構出土石器第603図9の端部破片と『寺野東遺跡IV』の谷部出土石器第369図6の中央部破片の2点が接合し同一個体となったので、2点を1点としてカウントした。なお、接合した独鉛石は、環状盛土遺構内側の削平部(E5-R10-H)から出土した端部破片と水場遺構が検出された谷部(D5-t19ロ)から出土した中央部破片が接合したもので、約65m離れて出土した2点の破片が接合した。

またこの結果、発掘調査報告書の接合関係図に土偶8個体、土版4個体、土製耳飾8個体、ミニチュア土器1個体、蓋1個体、その他土製品2個体、石剣・石棒4個体が挙げられている(初山他 1997)が、これ等に前記の独鉛石が1個体加わることとなった。これ等の接合関係から、独鉛石の接合関係が石剣・石棒の接合関係と同じくかなりの距離で接合していることが明らかとなった。寺野東遺跡において、独鉛石の接合関係と石剣・石棒の接合関係に共通性の存在がみられた。

引用・参考文献

- 我孫子市史編集委員会 2005『我孫子市史』原始・古代・中世編 我孫子市教育委員会
- 天野 努・杉山晋作・種田齊吾 1981『Loc39(八代玉作)遺跡』『公津原II(本文編・押図編・図版編)』 千葉県教育委員会・財団法人千葉県文化財センター
- 飯塚博和 2000『内町貝塚』『千葉県の歴史』資料編 考古1 千葉県
- 石井 穂 1982『内町貝塚発掘調査報告書』関宿町埋蔵文化財調査報告第6集 関宿町教育委員会
- 石井 魁 1988『内町貝塚出土遺物資料紹介』『関宿町史研究』創刊号 関宿町教育委員会
- 石田守一 2000『下ヶ戸宮前遺跡』『千葉県の歴史』資料編 考古1 千葉県
- 伊藤和夫・金子治昌 1959『千葉県石器時代遺跡地名表 一県下の石器時代遺跡の分布とその分化』 千葉県教育委員会
- 今平昌子 2001『北の前遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第252集 栃木県教育委員会・財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 上野修一 1999『内陸の道 帆の旅人』『海を渡った開拓人』 小学館
- 内山敏行 1997『戸木内遺跡(第4次調査)』栃木県埋蔵文化財調査報告第195集 栃木県教育委員会・財団法人栃木文化振興事業団埋蔵文化財センター

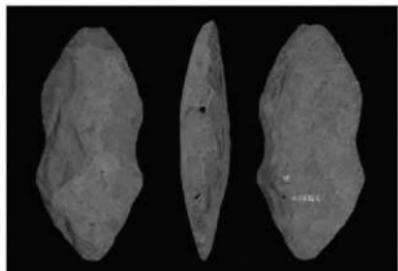
- 江原 英・谷中 隆・森嶋秀一・津野 仁・猪瀬美奈子・井上 武 1998『寺野東遺跡IV』栃木県埋蔵文化財調査報告第208集
栃木県教育委員会・小山市教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 大塚俊雄他 1994『平成5年度 繰ヶ谷市内遺跡発掘調査概報』繰ヶ谷市埋蔵文化財調査報告第9集 繰ヶ谷市教育委員会
- 大内千尋 2010「17 中沢貝塚」『繰ヶ谷市史資料編Ⅰ(考古)』繰ヶ谷市
- 大熊佐智子・大賀 健・小川将之 2005『野田貝塚 一第20・22次発掘調査— 清水遺跡』野田市埋蔵文化財調査報告書第29冊 野田市教育委員会
- 大熊佐智子・小川将之 2007『野田貝塚 一第23次発掘調査— 清水遺跡 二第2次発掘調査—』野田市埋蔵文化財調査報告書第36冊 野田市教育委員会
- 大野雪外 1909「獨鉗石の形式分類に就て」『東京人類学会雑誌』第24巻第276号 東京人類学会
- 大野雪外 1910「机上の友(一)」『東京人類学会雑誌』第26巻第297号 東京人類学会
- 岡村眞文他 1984「下ヶ戸貝塚」『我孫子市埋蔵文化財報告』第4集 我孫子市教育委員会
- 岡本孝之 1996「最後の白河型石器」『異貌』15 共同体研究会
- 岡本孝之 1999「遺物研究 獨鉗石型石器(獨鉗石・白河型石器)」『縄文時代』10 縄文時代文化研究会
- 岡本孝之 2003a「茨城県における弥生文化綱の再検討 一大森系新石斧と弥生系石製武器」『茨城県史研究』第87号 茨城県立歴史館
- 岡本孝之 2003b「扁平な白川型石斧」『利根川』24・25 利根川同人
- 岡本孝之 2004「埼玉県白川型石斧の再検討」『異貌』22 共同体研究会
- 岡本孝之 2006「青森県の白川型石斧」『古代』第119号 早稲田大学考古学会
- 岡本孝之 2007「白川型石斧の初顔形態」『異貌』25 共同体研究会
- 岡本孝之 2008「岩手県の白川型石斧」『神奈川考古』第44号 神奈川考古同人会
- 小倉和重 2003『宮内井戸作遺跡発掘調査概報』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第200集 財団法人印旛郡市文化財センター
- 小倉和重 2004「井戸長崎遺跡(第5次) 一市内重要遺跡確認調査報告書—」佐倉市教育委員会
- 小倉和重 2009『宮内井戸作遺跡 一しばりサーバー開発事業予定地内埋蔵文化財調査(8) 一』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第266集 財団法人印旛郡市文化財センター
- 小栗信一郎・小川勝和・宮川博司 2008『流山市三輪野山貝塚発掘調査概要報告書』流山市埋蔵文化財調査報告 Vol.40 流山市教育委員会
- 小澤清男 1985a「千葉市旦谷町北原遺跡発見の独鉗石」『貝塚博物館紀要』第12号 千葉市立加曾利貝塚博物館
- 小澤清男 1985b「千葉県八日市堺大堤遺跡出土の独鉗石と他2例」『法政考古学』第10集 記念論文集 法政考古学会
- 小澤清男 2009「千葉県の獨鉗石・獨鉗石形土製品(1) 一流山市三輪野山貝塚ならびに千葉市内野第1遺跡出土資料等から」『貝塚博物館紀要』第36号 千葉市立加曾利貝塚博物館
- 小澤清男 2010「千葉県の獨鉗石・獨鉗石形土製品(2) 一追加報告ならびに計測値の分析と使用石材の検討から」『貝塚博物館紀要』第37号 千葉市立加曾利貝塚博物館
- 忍澤成視 1995『市原市能溝上小貝塚』財団法人市原市文化財センター調査報告書第55集 財団法人市原市文化財センター
- 忍澤成視 1999『祇園原貝塚』上総國分寺台遺跡調査報告V 市原市教育委員会
- 折原 繁 2000「築地台貝塚」『千葉県の歴史』資料編 考古1 千葉県
- 折原 繁・斎木 勝・矢戸三男・杉山晋作・瀬戸久夫 1978『千葉市築地台貝塚・平山古墳』千葉東金道路建設工事に伴う埋蔵

文化財調査報告2 財団法人千葉県文化財センター

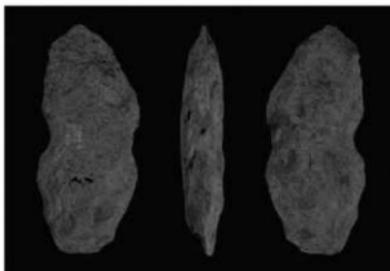
- 金子浩昌 1961 「大神台貝塚」『印旛・手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査』(本編) 千葉県教育委員会
- 喜多裕明 2008 「(40)印旛市馬場遺跡(第5地点)」『財団法人 印旛都市文化財センター年報23 一平成18年度一』財団法人印旛都市文化財センター
- 栗源町史編さん委員会 1974 『栗源町史』町制施行50周年記念 栗源町役場
- 栗本住弘・上村淳一 1979 『千葉東南部ニュータウン6 一椎名崎遺跡』 財団法人千葉県文化財センター
- 甲野 勇 1941 「猪鉢石資料」『古代文化』第12巻第5号 日本古代文化学会
- 後藤信祐 1985 「猪鉢状石器小考」『唐澤考古』第5号 唐澤考古会
- 後藤信祐 2001 『御前遺跡II』栃木県埋蔵文化財調査報告第248集 栃木県教育委員会・財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 酒詰伸男 1959 『日本貝塚地名表』 土曜会
- 酒詰伸男 1961 『日本縄文石器時代食料総説』 土曜会
- 設楽博己・春成秀爾 2000 『荒海貝塚』『千葉県の歴史』資料編 考古1 千葉県
- 柴田常惠増訂 1917 『日本石器時代人民遺物発見地名表』(第四版) 東京帝国大学
- 柴田 徹 2005 『改訂版 河原の石のCD岩石鑑定図鑑』 考古石材研究所
- 柴田 徹 2007 「比重から見た磨製石斧の石材」『松戸市立博物館紀要』第14号 松戸市立博物館
- 柴田 徹 2009 「比重を加味した岩石鑑定基準の提案」『松戸市立博物館紀要』第16号 松戸市立博物館
- 進藤敏男・合田恵美子・後藤信祐 2000 『御前遺跡I』栃木県埋蔵文化財調査報告第236集 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 福山林織・金子裕之 1972 『千葉県富士見台遺跡の調査』『考古学雑誌』第58巻第3号 日本考古学会
- 芹澤清八・大橋泰夫 2003 『鳴井上遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第269集 栃木県教育委員会・財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 袖ヶ浦市史編さん委員会 1999 『袖ヶ浦市史 資料編1 原始・古代・中世』 袖ヶ浦市
- 瀧口 宏他 1968 『加曾利貝塚II 一昭和39年度加曾利南貝塚調査報告』貝塚博物館資料第2集 千葉市加曾利貝塚博物館
- 瀧口 宏他 1977 『西広貝塚』上総国分寺台遺跡調査報告III 上総国分寺台遺跡調査団
- 海沢規朗 2002 「第V章 遺物 5石器・石製品 (24) 猪鉢状石器」『元屋敷遺跡II(上段) 本文編』奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書XIV 新潟県朝日村教育委員会・新潟県
- 武田宗久 1953 「第1節 原始社会」『千葉市誌』千葉市
- 田中正太郎・林 若吉編 1897 『日本石器時代人民遺物発見地名表』(第一版) 東京帝国大学
- 田中英世 2005 「千葉市内第1遺跡出土の石棒・石剣」『貝塚博物館紀要』第32号 千葉市立加曾利貝塚博物館
- 近森 正・藤村東男・山岸良二 1983 『佐倉市吉見台遺跡発掘調査概要II』佐倉市遺跡調査会
- 千葉県教育委員会 1983 『千葉県の貝塚 一千葉県所在貝塚遺跡詳細分布調査報告書』千葉県文化財保護協会
- 千葉県教育委員会 1997 『千葉県埋蔵文化財分布地図(1) 一東高麗・印旛地区(改訂版)』
- 千葉県教育委員会 1999 『千葉県埋蔵文化財分布地図(3) 一千葉市・市原市・長生地区(改訂版)』
- 千葉県君津郷教育会 1927 『千葉県君津郷誌』上巻 路川津店
- 千葉市教育委員会 1984 『千葉市埋蔵文化財分布地図(改訂版)附篇』
- 千葉市史編纂委員会 1976 『千葉市史 史料編1』原始 古代 中世 千葉市

- 千葉市史編纂委員会 1993 『絵にみる図でよむ千葉市図誌』上巻 千葉市
- 銚子市史編さん委員会 1981 『銚子市史』 銚子市
- 長南町史編さん委員会 1973 『長南町史』 千葉県長生郡長南町
- 津野 仁・榎木節也 2005 『東谷・中島地区遺跡群6 磯崎遺跡(2~7区)』 桜木県埋蔵文化財調査報告第292集 桜木県教育委員会・財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 手塚達亦 1999 『藤岡神社遺跡(遺物編)』 桜木県埋蔵文化財調査報告第197集 桜木県教育委員会・財団法人桜木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 手塚達亦 2001 『藤岡神社遺跡(本文編)』 桜木県埋蔵文化財調査報告第197集 桜木県教育委員会・財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 寺内博之 1997 『成田市鶴部北遺跡発掘調査報告書 第2分冊 一南台遺跡・立野遺跡・阪台遺跡』 成田市鶴部北遺跡調査会
- 寺村光靖編 1973 『下総国の玉作遺跡』 千葉県教育委員会
- 寺村光靖他 2000 『栗島台遺跡 一銚子市栗島台遺跡1973・75の発掘調査報告書』 銚子市教育委員会
- 東京国立博物館 1979 『東京国立博物館収蔵品目録』(先史・原史・有史)
- 東庄町史編さん委員会 1982 『東庄町史』 上巻 東庄町
- 永嶋正春 2010 「千葉県内出土の独鉛石に見られる赤鉛の分析 一佐倉市吉見台遺跡ならびに成田市土屋殿台貝塚出土資料を中心として」『貝塚博物館紀要』第37号 千葉市立加曾利貝塚博物館
- 中村宜弘 1995 「西ヶ堀込遺跡』『千葉県埋蔵文化財発掘調査沙報-平成5年度-』 千葉県教育委員会
- 中村宜弘 1999 「船橋市田喜野井・西ヶ堀込遺跡について 一縄文時代の集落一』『資料館だより』第75号 船橋市歴史資料館
- 西村正衛 1976 「千葉県成田市荒海貝塚(第二次調査) 一東部関東における縄文後、晩期文化の研究(その二 続き) 一』『学術研究 一地理学・歴史学・社会科学編』第25号 早稲田大学教育学部
- 西村正衛他 1965 「関東における縄文式最後の貝塚 一千葉県成田市荒海貝塚』『科学読売』第17卷10号 読売新聞社
- 西山太郎 1986 「東金市龍沢貝塚について』『竹籠』創刊号 北總たけべらの会
- 西山太郎 2000 「八代花穴遺跡』『千葉県の歴史』資料編 考古1 千葉県
- 野村幸希・千葉達造・西山太郎 1973 『袖ヶ浦町山野貝塚』 東京電力株式会社・財団法人千葉県都市公社
- 橋本澄朗・上野修一・鈴木 元・城本節也・平久保直希・合田恵美子・玉橋さやか 2001 『八剣遺跡』 桜木県埋蔵文化財調査報告第254集 桜木県教育委員会・財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 初塙野博之・山崎真治・諫訪 元 2006 『東京大学総合研究博物館 人類先史部門所蔵縄平貝塚出土標本』 東京大学総合研究博物館標本資料報告第67号 東京大学総合研究博物館
- 初山孝行・青柳平人・谷中 隆・江原 英・猪瀬美奈子・井上 武 1997 『寺野東遺跡V』 桜木県埋蔵文化財調査報告第200集 桜木県教育委員会・財団法人桜木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 林田利之・高橋 誠・末武直則 1991 『向台II遺跡』 財団法人印旛郡都市文化財センター発掘調査報告第48集 松戸市・財団法人印旛郡都市文化財センター
- 林田利之 2000 『吉見台遺跡 A 地点 一縄文時代後・晩期を主体とする集落跡と貝塚の調査』 財団法人印旛郡都市文化財センター発掘調査報告第159集 佐倉市・財団法人印旛郡都市文化財センター
- 平山敦子 1998 「桜木県内出土の独鉛状石器集成』『桜木県考古学会誌』19 桜木県考古学会
- 藤岡孝司 1986 「第II部 編文時代』『八千代市ラサル山 一笠田地区埋蔵文化財調査報告書III』 財団法人 千葉県文化財センター

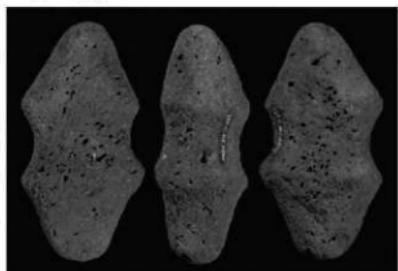
- 藤下昌信・寺内博之・喜多圭介・藤原 均 1984 『成田市舞部北遺跡群調査概要(加定地・順台遺跡)』 成田市舞部北遺跡調査会
古谷 渉・田中美世他 2001 『千葉市内野第1遺跡発掘調査報告書』第I・II・III分冊 財団法人千葉県文化財調査協会
堀越正行 1988 「中島辨智氏旧蔵の網文土器(1)」『市立市川考古博物館年報』No.16 市立市川考古博物館
堀越正行 2003 「記録にみる染谷大太郎氏の業績」『沼南町史研究』第7号 沼南町教育委員会
堀越正行 2004 「(1) 染谷大太郎資料」『千葉県の歴史』資料編 考古4 千葉県
堀越正行・佐々木和博・森 広樹 1980 『中島辨智コレクション』市立市川考古博物館
堀越昭夫・高田 博・山田友治 1980 『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 千葉県教育委員会・財団法人千葉県文化財センター
光江 章・上本進二・林 美佐 2004 『大山台遺跡』『西霞ヶ浦遺跡群発掘調査報告書X』 財団法人 君津都市文化財センター
三宅米吉 1892 「練案事件」『東京人類学会雑誌』第7巻第74号 東京人類学会
安井健一 2007 「上宮田台遺跡の概要」『千葉縄文研究会 第26回例会資料』 千葉縄文研究会
安井健一 2010 『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書10 一袖ヶ浦市上宮田台遺跡2(旧石器・縄文時代)一』千葉
県教育振興財团調査報告第638集 國土交通省・財団法人千葉県教育振興財團
八木柴二郎 1893 「千葉地方貝塚探査報告(続、図入)」『東京人類学会雑誌』第8巻第88号 東京人類学会
八幡一郎・中谷治二郎増訂 1928 『日本石器時代遺物発見地名表』(第五版) 東京帝国大学
八幡一郎他 1973 『貝の花貝塚』松戸市文化財調査報告第4集 松戸市教育委員会
横田和美 1993 「江原台遺跡出土の土偶について」『明治大学考古学博物館館報』No.8 明治大学考古学博物館
吉野健一 2006 『東関東自動車道(木更津・富津線)埋蔵文化財調査報告書7 一君津市三直貝塚一』 財団法人千葉県教育振興
財團
領冢正浩 1988 「中島辨智氏旧蔵の石器(1)」『市立市川考古博物館年報』No.16 市立市川考古博物館
和田伸哉 2007 「印西市馬場遺跡(第5地点)」『印旛郡市文化財センター年報23 一平成18年度一』財団法人印旛郡市文化財セ
ンター
- University of Tokio 1884 『Catalogue of Archaeological Specimens with Some of Recent Origin.』 Scientific
Museum, Department of Science, University of Tokio



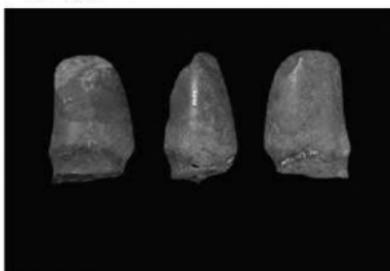
1 貝の花貝塚 a



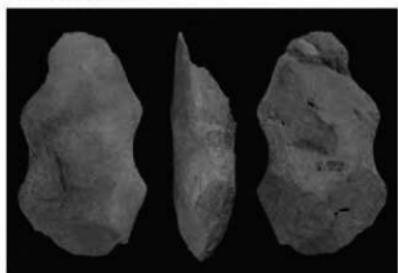
1 貝の花貝塚 b



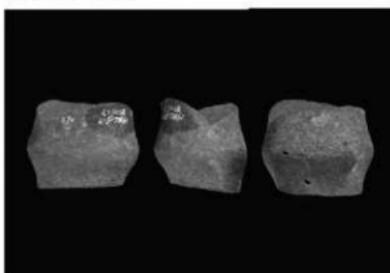
2 三輪野山貝塚 a



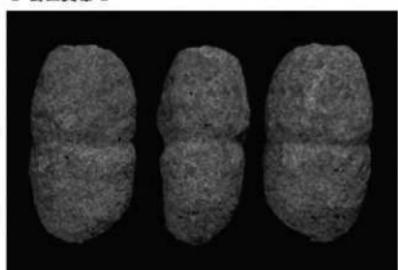
2 三輪野山貝塚 b



3 野田貝塚 a



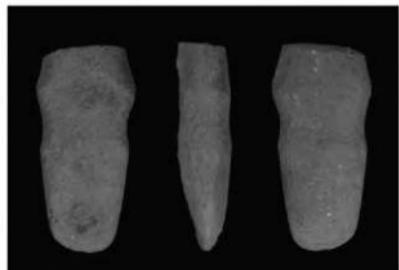
3 野田貝塚 b



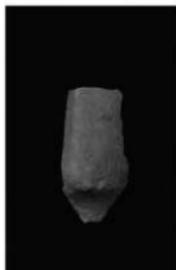
4 内町貝塚 a



写真図版 1 千葉県内出土の独鉛石
5 下ヶ戸貝塚(下ヶ戸宮前) a



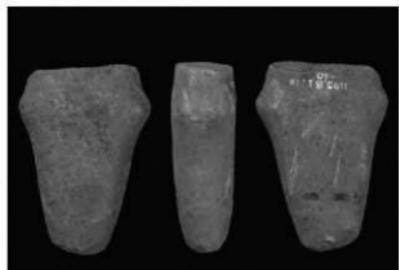
5 下ヶ戸貝塚(下ヶ戸宮前) b



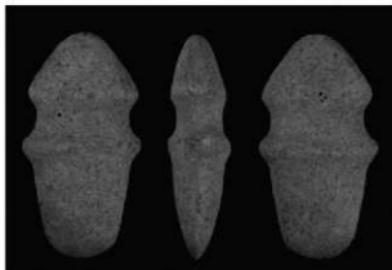
5 下ヶ戸貝塚(7次) c



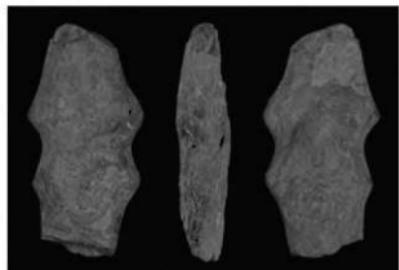
5 下ヶ戸貝塚(7次) d



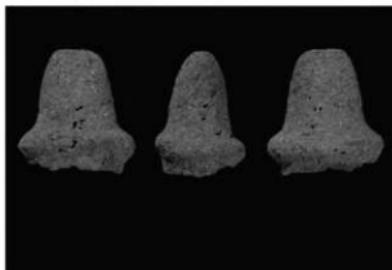
6 天神台貝塚 a



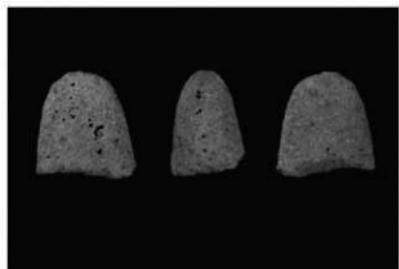
7 馬場遺跡 a



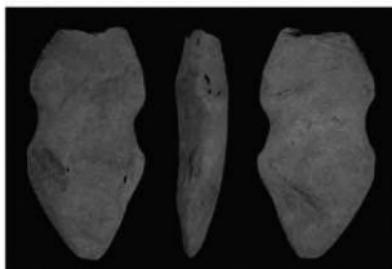
7 馬場遺跡 b



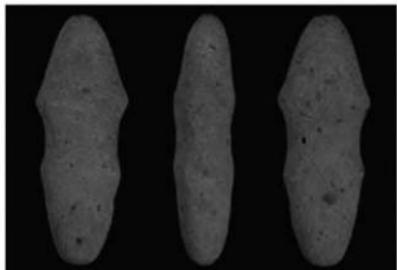
7 馬場遺跡 c



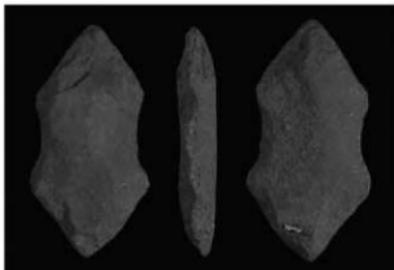
7 馬場遺跡 d



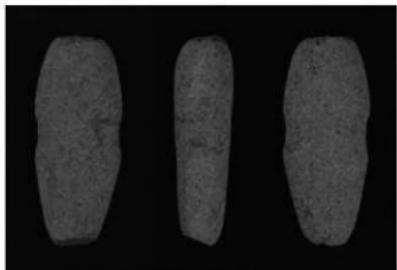
8 井野長齋遺跡 a



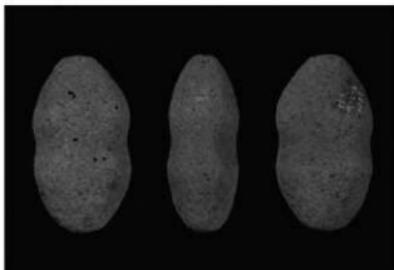
9 吉見台遺跡 a



9 吉見台遺跡 b



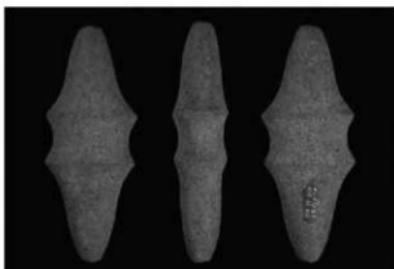
9 吉見台遺跡(A地点) c



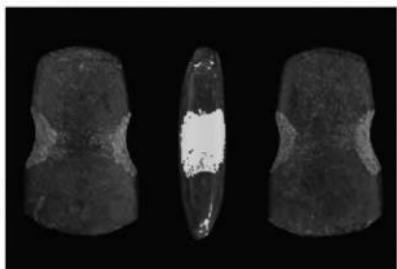
10 江原台遺跡 a



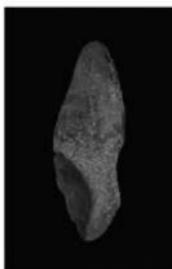
11 岩富上ノ袖京遺跡 a



12 宮内井戸作遺跡 a



12 宮内井戸作遺跡 c



12 宮内井戸作遺跡 b

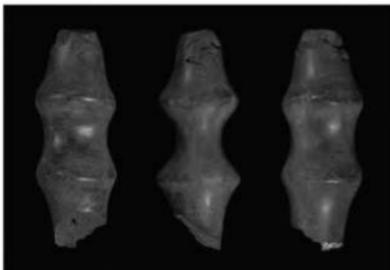


12 宮内井戸作遺跡 d

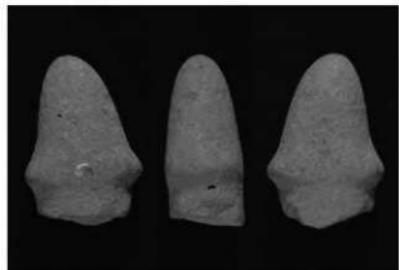
写真図版3 千葉県内出土の独鉛石



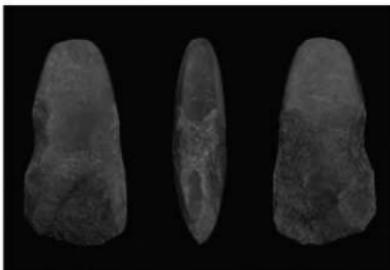
13 八代玉作遺跡 a



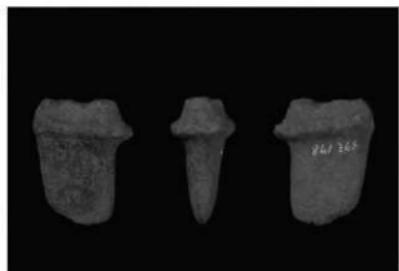
14 土屋殿合貝塚 a



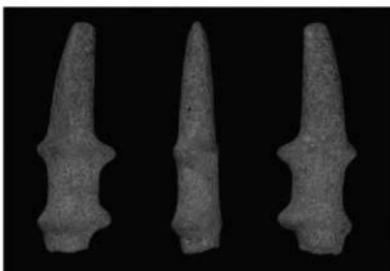
14 土屋殿合貝塚 b



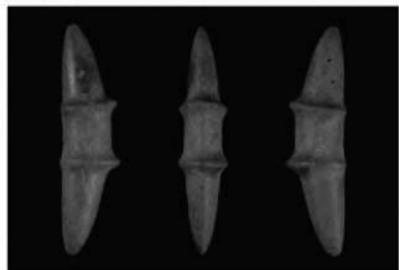
14 土屋殿合貝塚 c



15 荒海貝塚 a 独鉛石形土製品



16 波間西遺跡 a

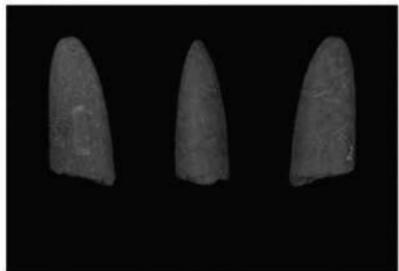


18 大堤遺跡 a

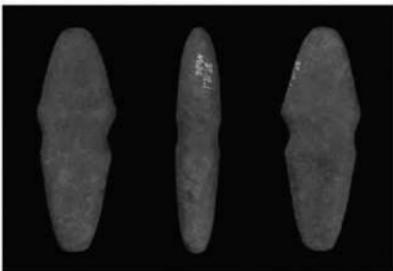


20 芥毛南遺跡 a

写真図版4 千葉県内出土の独鉛石



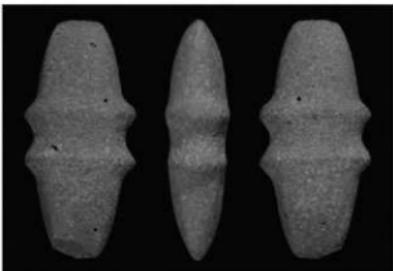
21 五十塚遺跡 a



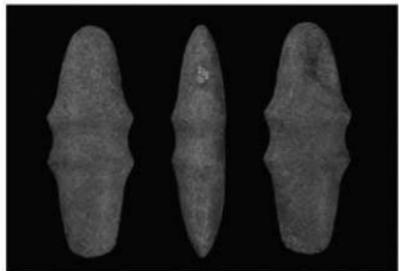
22 林遺跡 a



23 折戸遺跡 a



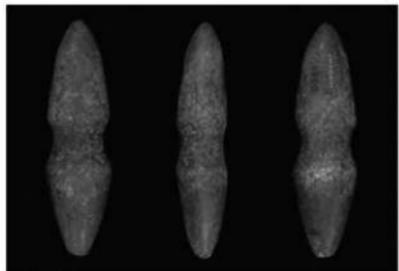
24 富士見合員塚 a



25 三直員塚 a



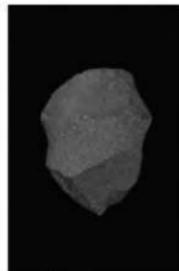
26 三直員塚 b



27 山野員塚 a

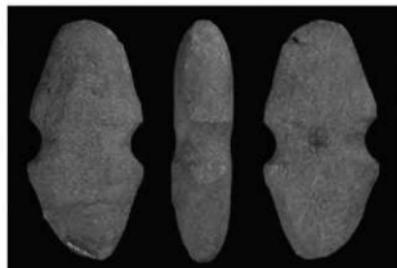


28 西広員塚 a

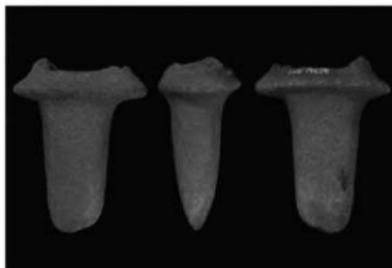


29 西広員塚 b

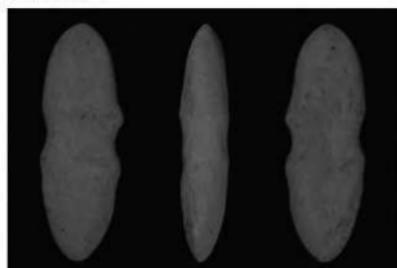
写真図版5 千葉県内出土の独鉛石



28 西広貝塚 c



28 西広貝塚 d 條形底



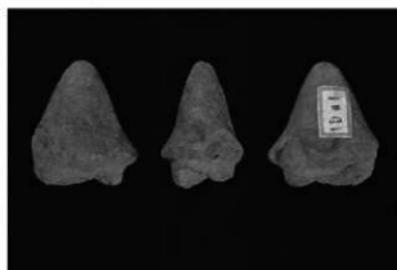
29 石岡原貝塚 a



30 能満上小貝塚 a



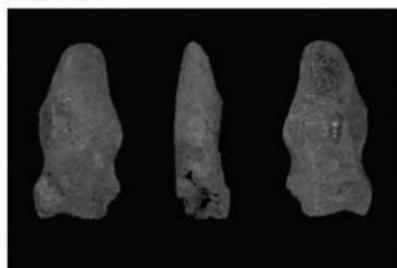
30 能満上小貝塚 b



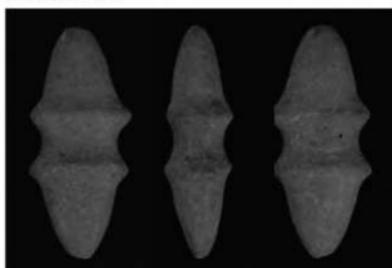
31 六通貝塚 a



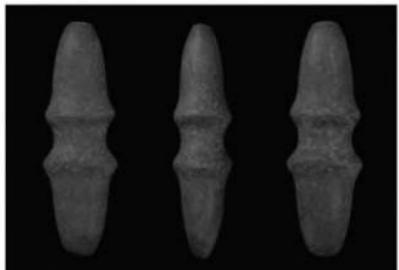
32 椎名崎遺跡 a



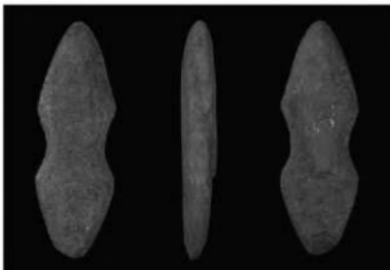
32 椎名崎遺跡 b



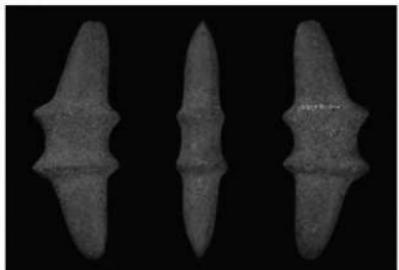
33 笠地合貝塚 a



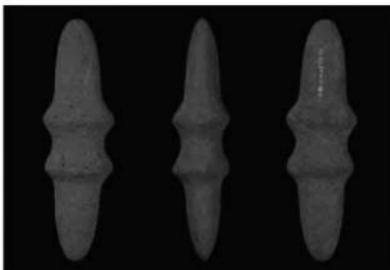
33 篠地台貝塚 b



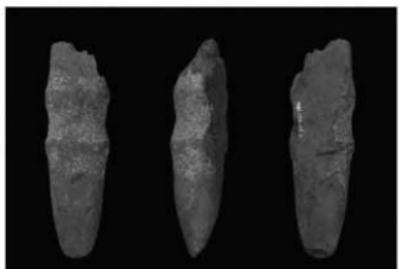
34 押元貝塚 a



35 加曾利貝塚 b



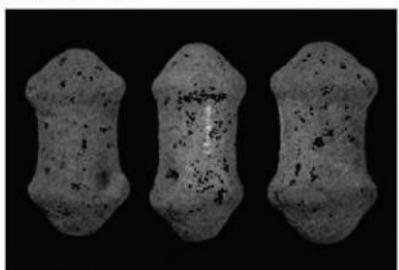
36 北原遺跡 a



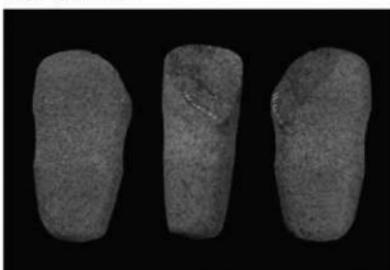
37 内野第1遺跡 a



37 内野第1遺跡 b

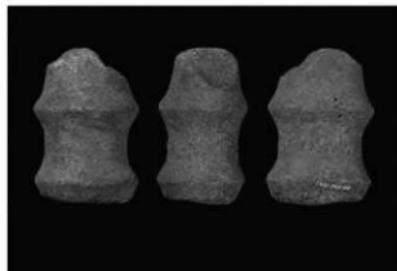


37 内野第1遺跡遺跡 c



37 内野第1遺跡 d

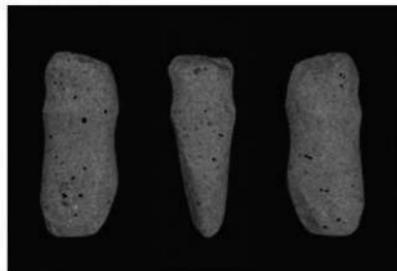
写真図版7 千葉県内出土の独鉛石



37 内野第1遺跡 e



37 内野第1遺跡 f



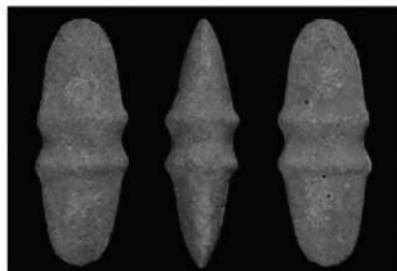
38 西ヶ堀遺跡 g



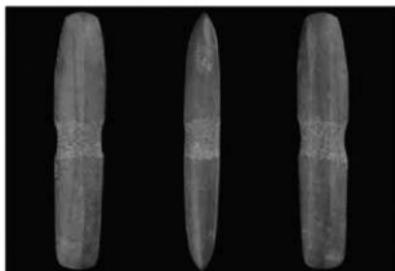
39 古作貝塚 a



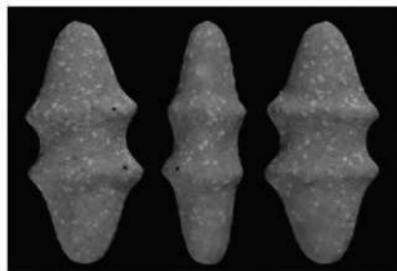
40 中島コレクション



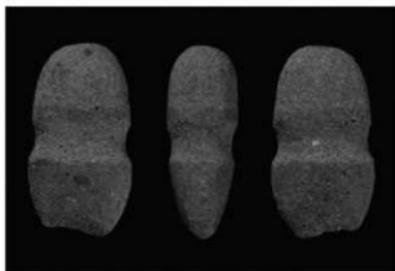
41 向台Ⅱ遺跡 a



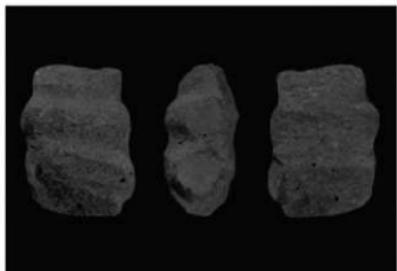
42 ラサル山遺跡 a



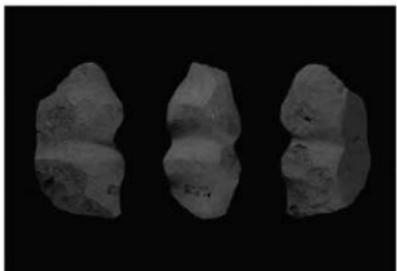
43 大山台遺跡 a



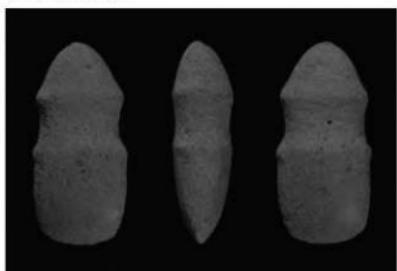
44 上宮田合遺跡 a



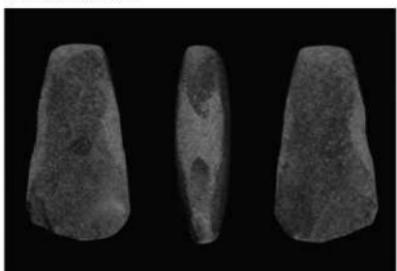
44 上宮田台遺跡 b



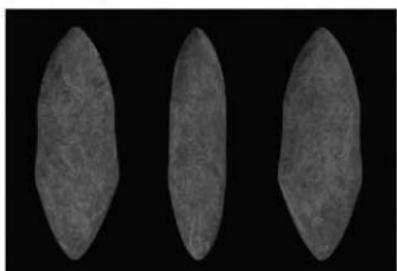
44 上宮田台遺跡 c



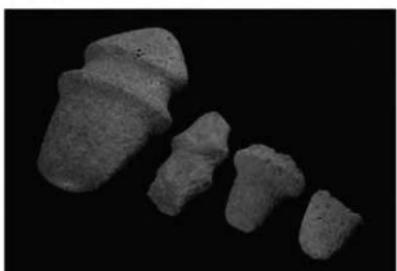
44 上宮田台遺跡 d



45 中沢貝塚 a



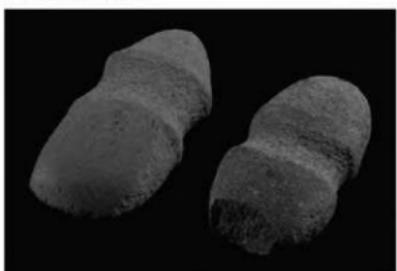
46 滝沢貝塚 a



7 馬場遺跡 a-b-c-d



26 三直貝塚 a-b



44 上宮田台遺跡 a-d

写真図版9 千葉県内出土の独鉛石